都留文科大学大学院紀要　第26集（2022年３月）
THE TSURU UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL REVIEW,
No.26（March, 2022）

古代ギリシアにおける教養･教育の理念に関する研究 (22)
―W. イェーガーの『パイデイア』に学ぶ―

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (22) :
Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑　　潤
Jun HATA

Ⅰ．本研究の課題と小論の対象・構成について

1. 本研究の課題と経緯

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー（1886 ～ 1961）の著書『パイデイア―ギリシア的人間の人格形成―』（*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*）の G. ハイエットによる英訳版『パイデイア―ギリシア的教養の理念―』（Paideia:The Ideals of Greek Culture）から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究 (19)（都留文科大学大学院紀要第 25 集、2021 年 3 月）に直接連続する。

2. 小論の対象と構成

小論 II. は､『パイデイア』第 II 巻（第 3 編）の「2 The Memory of Socrates ソークラテースの思い出」の（第 2 節）「SOCRATES THE TEACHER 教師としてのソークラテース」の後半部を対象とし、その訳出と＜注記と考察＞で構成する。その後に≪原文注記≫を配し、続いてそれに対する＜注記と考察＞を記す。

また小論の末尾に、III.「現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノー⑯～継続研究 (22) における～」を置く。

3. テキストと論述の仕方など

イ）テキストは第 II 巻（1944 年版）を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは 1944 年版のものである。なお和訳に際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一巻にまとめられた復刻版（1989 年、初版：1973 年）を用いている。

ロ）キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、英語とともに適宜ドイツ語も挿入し（格変化などは、構文の類推可能性のことを考え、原文中のまま扱っている）、その訳を付すようにした。また、＜注記と考察＞などでギリシア古典からの訳文を引用する際に、そのなかの訳語を確認するためにギリシア語、英語を挿入する場合がある。それらは､とくに注記しない場合は､すべてローブクラシカルライブラリーに拠っている。

ハ）訳文中の一項目が複数段落になっている場合は、段落ごとに説明の小見出しを〖 〗という記号で付ける。つまり、項の見出しも段落ごとの小見出しも英訳版の区切りに基づき、私が便宜的に付したものである。その他のカッコの表記などは、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ）＜注記と考察＞における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究 (5) と同様である。

4. 本継続研究における訂正と補筆

［訂正について］（その 11）

イ）本継続研究 (16) 68 頁の下から 13 行目に誤字がある。

（誤）「以下に→（正）「如何に

ロ）本継続研究で繰り返し引いている拙論「世界にかかわって生きることと内的なものへの憧憬と――社会教育・生涯学習の哲学を考える――」（『畑・草野滋之編『表現・文化活動の社会教育学――生活のなかで感性と知性を育む――』学文社、2007 年、所収』の〈注〉に、ギリシア語スペルの誤りと叙述の不正確さがあり、ここでお詫びし訂正しておく（著書ページ 38）。

注 (14)：誤りのあるスペルを太字にし、訂正を行なう。

（誤）

ων **ουτοεν ουτω** πωποτε εμεληση εν

（正）

ὧν **οὐδὲν τούτω** πώποτε ἐμέλησεν

注 (15)：不正確な叙述部分をゴチにし、修正を行なう。

（誤）

κηδω ケードーで、「気遣う、心にかける、心配する」という意味（英語訳 concerned）。なおケードーは、プラトーンの対話篇『国家』のはじめや (344E)、ソークラテースが青年トラシュマコスを、本当にそう思っているのかと真に厳しく批判するときなどにも使われており（『国家』415D）、その対話篇の生命力にかかわるほどの重要な意味をもつ（該当箇所の英語訳は care）。

（正）

κήδω ケードーで、「気遣う、心にかける、心配する」という意味（英語訳 concerned）。なおケードーは、**プラトーンの対話篇『国家』のはじめの、ソークラテースが青年トラシュマコスを本当にそう思っているのかと真に厳しく批判するときや（344E,care…for）、その他（415D,care for）でも使われており、**その対話篇の生命力にかかわるほどの重要な意味をもつ。

［補筆について］（その 8）

イ）継続研究 (20) IV の 1）2. の末尾（論文ページ 140 の上から 9 行目）に (1α) を加える（「･･･ まるで対話をしているようである。(1a)」）。

＜注記と考察＞（論文ページ 148）

(1a)『月刊社会教育』（旬報社）の 2021 年 10 月号に、井上力省の論稿「忘却に抵抗する公共空間――「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」と「ドイツ抵

抗記念館」から考える」が掲載されている。学生のレジスタンス･グループ「白バラ」のことも含む充実した論稿である。

また『月刊社会教育』の同号には、穂積健児の実践記録「老いてなお青春――学びあい、支えあう会の軌跡」が掲載されている。そこに「･･･ 日朝協会の役員でもある吉田博徳さんを講師に「日本と朝鮮の 2000 年」という講演会を 2018 年に 2 回実施し、延べ 150 人の参加があった。そして、この講演の出版を企画し、普及活動を始めた ･･･」という記述がある。

ロ）継続研究 (20) IV. 1) 3. の叙述の末尾（論文ページ 140 の下から 15 行目）に (3a) を加える（「･･･ いっそう明白になる。(3a)」）。

＜注記と考察＞（論文ページ 148）

(3a) 田中武雄の論稿「戦後 70 年に五十嵐顕先生を懐う」（民主教育研究所編『人間と教育』89 号、2016 年春、旬報社、所収）は、五十嵐からの私信も含む、重要な〈五十嵐顕研究〉の入門となるものである。そこには「･･･ 五十嵐先生が「テレジンの子どもの絵とフリードル・ディッカー・ブランディズ先生」の紹介文を書かれていた。先生にとってこの時の経験は大きかった。」という叙述がある。

ハ）継続研究 (20) IV の＜注記と考察＞ (2)（論文ページ 148）の末尾に改行して次のような補筆をする。

ところで佐藤広美の近著『戦後教育学と戦争体験――戦後教育思想史研究のために』（大月書店、2021 年 5 月）は、「教育原論」としての性質が鮮明なものとなっているが、そこには五十嵐の『「わだつみのこえ」を聴く――戦争責任と人間の罪との間――』の検討を含む充実した「五十嵐顕論」がある（第 5 章､補論 1､補論 2）。著書全体に佐藤自身の探究精神が働いており、細部にわたって注意深く読み抜かなければならない。

Ⅱ.「ソークラテースの思い出」（英訳版第Ⅱ巻第３編の２The Memory of Socrates）

英訳版第Ⅱ巻、1944 年版：13p ～ 76p

Ｂ．教師としてのソークラテース

（SOCRATES THE TEACHER, Sokrates als Erzieher） 英訳版第Ⅱ巻、27p ～ 76p

14. ソークラテースの対話は「自分自身の無知」の認識と「自分自身の力（能力）」の認識に始まる方法に拠っているが、到達を目指しているのは、古典的な意味における「政治的な美徳（political virtue, „politischen Tugend“）である

＜訳文＞ 59p ～ 62p

〖ソークラテースは当代の「パイデイアー」概念を批判的に吟味していくが､そのソークラテース的アイロニー（Socratic irony, sokratischen Ironie）をとおして、彼が真の教師の職務とその難しさについて彼の同時代者のだれよりもはるかに高度な考え方（a

far higher idea）を持っていることが明白になる〕この最高に偉大な教師が、だれもが彼をパイデイアーのもっとも完全な具現とみなしているにもかかわらず、自分自身の仕事をそのように考えることを避けたということは一つの驚くべき逆説である。もちろんそのことば〔=パイデイアー〕はいつまでも棚上げされ得るものではなかった:プラトーンとクセノポーンはソークラテースの活動と彼の哲学を描写するために、それを絶え間なく用いている。しかし彼自身は、当時の教育の理論と実践（educational theory and practice, die pädagogische‘ Praxis und Theorie）はその言葉を、自分が使うにはあまりにも難しいものにしてしまっていると考えた。《143》それは過多を要求するか過小を意味した。それゆえ、彼が若い人たちを堕落させる（corrupting, verderbe）といって告訴されたときは、彼は、自分は彼らを教育し（teach, erziehen）(1) ようとしている――彼らをソフィストたちによって与えられる職業的な教育（the professional training, den technischen Betrieb des berufsmäßigen Unterrrichts 職業的教授という専門的な営業）に委ねるということを意味して――と主張したことは決してなかったと説明した、《144》ソークラテースは‘教師 (teacher, Lehrer)’ではないとはいえ、彼は絶えず真の教師（a true teacher, dem wahren Lehrer）というものを、これまで見出すことができないまま、‘探して (in quest, auf der Suche)’いた。彼がせいぜい見出したのは、あれこれの分野で推奨され得る、有能な専門家というものであった；《145》しかし彼は、ことばの十分な意味で *teacher*（教師）というものを見出すことはできなかった。真の教師とは珍しい鳥である。たしかに、だれも皆パイデイアーという重要な仕事を手伝っていると主張する：詩歌（poetry, die Dichtung 文芸作品）、諸科学（the sciences, die Wissenschaften）、諸芸術（the arts, die Künste）、法（the law, die Gesetze）、国家（the state, der Staat）、ソフィストたち（the sophists, die Sophisten）、雄弁家たち（rhetors, Rhetoren）、そして哲学者たち（philosophers, Philosophen）など、さらには都市の法と秩序を維持するのを手伝うすべての実直なアテーナイ市民でさえ皆、自分が若い人たちを向上させるように最善を尽くしていると思い込んでいる。《146》ソークラテースは、そのような技術（that art, diese Kunst）を自分が理解しているとは思わない。彼は、自分が若い人たちを堕落させている唯一の人間であるということにただ驚いている。彼は他者の大変な自負を、新しいパイデイアーの概念（a new conception of paideia, einem neuen Paideia-Begriff）によって、それは彼に彼らの正当性を疑わせるのであるが、判断する；しかし彼は自分もまた自分自身の理想（ideal, Ideal）に値しないと思っている。だから、この正真正銘のソークラテース的アイロニー（Socratic irony, sokratischen Ironie）すべての裏に、ソークラテースが真の教師の職務（the real teacher’s task, der Augabe der wahren Erziehung 真の教育の任務）とその難しさについて彼の同時代者のだれよりもはるかに高度な考え方（a far higher idea）を持っていること (2) が明白になる。

〔**非凡な若者たちの「パイデイアー」を渇望する気持ちとソークラテースの教育愛（educational love, erzieherischer Eros）**〕彼の自分自身の教育（teaching, Erziehertums 教師性）に対するアイロニックな態度は、彼がパイデイアーの必要性（the necessity of paideia, die Notwendigkeit der Paideia）を支持もし、しかも他者がそれを生みだそうとするきわめて熱心な努力を拒絶もするという外見上のパラドックス（paradox, Widerspruch 矛盾）を説明するのを助ける。《147》ソークラテースの教育愛（educational love,

erzieherischer Eros）、彼のerôs、[3]は主として、最高の知的、倫理的教養（culture, Bildung）に、つまりareté[4]に適った非凡な若者たちに注がれる。彼らの回転の速い理解力、かれらの良い記憶力、そして彼らの学びたい気持ちは、パイデイアーを求めて叫んでいる（call for paideia, rufen nach Paideia）。[5]ソークラテースは、そのような人たちは、彼らが適切に教育される（properly educated, die rechte Erziehung）ことがなければ、自分たちがしたいことをどれも達成できず、同時に他者を幸福にすることもできない、ということを確信している。《148》知識（knowledge, des Wissens）を軽蔑し自分自身の才能（their own talents, ihre natürlichen Gaben そのもって生まれた天賦の才）を当てにする者たちもいる。そういう者たちに対しては、彼は、彼らは正にもっとも訓練（schooling, der Ausbildung）が必要な者たちであるということを説明する――ちょうど、生まれつき素晴らしい品種、気性の最高の馬や犬が厳格に監督され訓練され（disciplined, abgerichtet）なければならず、しかるに、もし調教も訓練もされなければ、それらは他のものよりも悪くなるように。天賦の才のある性質（gifted natures, die begabten Naturen 天賦の才のある素質）は、もしそれらがその才能に相応しい何事かを達成しようとすれば、平凡なそれよりも明察（insight, der Einsicht 分別）と批判的判断力（critical judgment, des kritischen Urteils）をより多く必要としている。《149》教養（culture, die Bildung）を見下す資力をもっていると考える金持ち（the rich man, den Besitzenden）はどうかというと、ソークラテースはその人間の目も開いて、彼に、判断もなく、それに良くない目的のために用いられる富（wealth, eines Reichtums）がいかに役に立たないかを教える。《150》

〖ソークラテースは教養人ぶっている若者を、「読書によって得た知識（book-learning）」に拠ってではなく、自分自身の無知の認識と自分自身の力の認識に始まる方法に拠って、一般的な知的教育の目標である政治的な美徳（political virtue, „politischen Tugend“）の到達に向かわせていく〗しかし彼は、高慢にも自分たちがその文学的知識と知的関心によって同時代者たちを超えていると、また政治的生活（in political life, im öffentlichen Leben 公共生活）においてすでに（already, im voraus あらかじめ）最高の成功を勝ち得ていることは確かだと思っている、そのような人びとの教養の上流気取り（the cultural snobbery, dem Bildungsdünkel 教養上の慢心）については、まったく同じように辛辣である。エウテュデーモス、あの何事にも感激しなくなった（blasé, blasierte 高慢な）若者、はこのタイプのむしろとても可愛らしい代表者である。《151》ソークラテースの彼〔= エウテュデーモス〕の一般教養（his general culture, seiner allgemeinen Bildung）についての批評（criticisms, die Kritik）は、彼〔= エウテュデーモス〕の非常に洗練された鎧に割れ目を見いだしている：というのは、彼〔= エウテュデーモス〕が詩歌から医学まで、数学から建築学まで、ありとあらゆる専門分野の書物を持っているように見えるのであるが、それにもかかわらず彼の書棚には一つの隙間（one gap, eine Lücke 一つの欠落箇所）がある。そこには、政治的な美徳（political virtue, politischen Tugend）の案内（guide, Wegweiser）が無いのだ。[6]しかも若いアテーナイ市民にとっては、政治的な美徳はあらゆる一般的な知的教育（any general intellectual. Education, aller allgemeinen Geistesbildung 一般的な知的教養）の当然の目標なのである。それならばそれ〔= 政治的な美徳〕は、独学者（a self-taught man, der Autodidakt 独学者）が、医学においてであれば自分が（あっさりと：kurzweg）偽医者（a quack, einen Pfuscher

もぐりの医者）と呼ばれるだろうけれども、権威者と話すことが出来る、そのような唯一の技術（art, Kunst）であろうか？《152》人は政治家の手腕（the art of statesmanship, der Staatskunst 国制の手腕）においてみんなから信頼を得ることが、自分の教師（his teacher, seiner Lehrmeister 自分の師匠）や自分の以前の実績（his previous performances, seiner bisherigen Kunstproben）を示すことによってではなく、自分が何も知らないことを証明することによってできるだろうか？ソークラテースはエウテュデーモスに、彼が準備している職業（the calling, der Beruf）は王者的なもの（a kingly one, die königliche Kunst 王者的な技術）であること、《153》また公正（just, gerecht）でなければ誰もそれを成就できないということを納得させる。彼〔= ソークラテース〕が教養のない人びと（uncultured people, die ihre Bildung vernachlässigen 教養をなおざりにしている者）を鼓舞して自らを向上させるために何かをする気にさせるのと同じ方法で、彼は今や、教養人ぶっている者（the culture-snob, der sich einbildet, Bildung zu besitzen 教養をもっていると思い込んでいる者）にその者が一つの本質的要素（the one essential, das Wesentliche 本質的なもの）――知識（knowledge）(7)――を欠いているという事実を悟らせる。エウテュデーモスは、正義（justice, der Gerechtigkeit）、不正（injustice, Ungerechtigkeit）の本質についての詰問（a crossexamination, ein Verhör）に引き込まれるが、それは彼に、自分がそれらのいずれをも本当に理解しているというわけではないということを教えるのである。そうして今や、読書によって得た知識（book-learning, des Bücherstudiums）の代りに、政治的な美徳（political virtue, „politischen Tugend“）に到達する別の方法を教えられるのであって、それ〔= 政治的な美徳に到達する別の方法〕は自分自身の無知（his own ignorance, eigene Nichtwissen 自分の無知）の認識から、および自己認識（self-knowledge, der Selbsterkenntnis）から――すなわち自分自身の力の認識（the knowledge of his own powers, der Erkenntnis der eigenen Kräfte）から――始まる。(8)

〖ソークラテースが論議する美徳（the virtues, die Tugenden）は、古典的な意味において、‘政治的なもの（political, politisch）’である〗われわれの証拠（evidence, Quellen 資料）は、これ（この方法：dieser Weg）が正真正銘のソークラテースの手順であったこと、また彼の教育的情熱（his educational passion, seine erzieherische Leidenschaft）の目的がほかならぬこの政治的な美徳（political virtue, politische Tugend）であったこと、を疑問の余地のないものとする。(9) 政治的な美徳の意味は、プラトーンの初期のソークラテースの対話篇（dialogues, Dialoge）にもっとも明瞭に示されている。今日これらの著作（these works, diese Dialoge）は（確かに：zwar）通常、アリストテレースが与えた名称で呼ばれている――彼はそれらを倫理的対話篇（the *ethical* dialogues, „ethisch“ 倫理的）と呼んでいる。《154》しかし今日では（nowadays, für uns Moderne われわれ近代精神にとって）、その名称は容易に誤解に通じる。われわれはその ‘ethical’（das Ethische 倫理性）が共同社会の生活を共にすること（sharing in the life of the community, als Teil und Ausdruck des Seins der Gemeinschaft 共同社会のありようの一部であり典型的な表れであると）――それ〔= 共同社会の生活を共にすること〕はアリストテレースにとってそれの〔=ethical の〕当然の意味であった――《155》を意味するとは考えない；事実われわれはしばしば、ethics（倫理）の本質を（まさに：*gerade*）それ〔= 倫理〕の政治（politics, Politischen）からの分離であると考えている（から：da）。この、おのおのの個人の内

面生活（the inner life of each individual, des indiviuellen innerlichen Bereichs 個人の内的領域）の共同社会からの分離は、単に現代の哲学者たちによって作られた抽象概念（an abstraction, eine Abstraktion）というものではない。それ〔= おのおのの個人の内面生活の共同社会からの分離〕は、われわれの思考と生活様式（ways of life）に深く根差している。それは、近代の‘キリスト教徒の’世界の何世紀もの二重基準（double standard, der doppelten Buchführung 複式簿記）――それは個人の倫理生活に対する福音書の厳格な要求を認める、しかし国家の行為を別の‘自然の（natural, natürlichen）’規範（standards, Maßtäben）によって判断する――によって生み出されている。このこと〔=（前文の歴史経緯）〕はギリシア都市国家の生活においては統合されていた二つの要素を分離するだけではなく、それ〔=（前文の歴史経緯）〕はその倫理（ethics, des Ethischen）と政治（politics, Politischen）の意味そのものを変える。この事実は、ほかのどのようなことよりも、われわれがギリシア（Greece, der griechischen Situation）を理解するのを困難にする：というのは、それ〔= この事実〕は、われわれがソークラテースが論議する美徳（the virtues, die Tugenden）は‘政治的なもの（political, politisch）’だと言うとき、われわれが‘倫理的な（ethical）’対話篇（dialogues）のことを話すときとまったく同様に、われわれを誤解に陥りやすくする。われわれが、ギリシア人の全生活および倫理性（morality, seine Sittlichkeit その倫理観）がソークラテースとアリストテレースによって言われる意味で‘政治的（political, politisch）’であったと言うとき、われわれは、政治（politics, der Politik）と国家（the state, des Staates）の現代的な専門的概念（technical conception, technisierten Begriff）とは非常に異なったもののつもりで言っている。われわれはそのことを、抽象的に響くことば‘国家（state, Staat）’（後期ラテン語 *status*[10] に由来する）と具体的なギリシア語‘polis（*Polis*）’、それはわれわれの心に人間の共同社会（the human community, des menschlichen Gemeinschaftsdaseins 人間の共同社会の暮し）と、それ〔= 人間の共同社会〕ともお互いにも有機的に関係している個々人の生活（the individual lives, Einzelexistenz）との、生き生きした全体をありありと呼び起こすのであるが、その‘polis’との間の相違を考慮しさえすれば、はっきり理解できる。さて、プラトーンの、敬虔さ（piety, Frömmigkeit）、正義（justice, Gerechtigkeit）、勇気（courage, Tapferkeit）、賢明さ（prudence, Besonnenheit）についてのソークラテースの対話篇（Plato’s Sokratic dialogues, Platos sokratische Dialoge）が‘政治的な’美徳（‘political’ virtue, der politischen Tugend）の本質の研究であるのは、その古典的な意味においてなのである。[11] われわれがすでに明らかにしてきたように、通常プラトーンの基本的な美徳（cardinal virtues, Kardinaltugenden）と呼ばれるものの四部分から成る規範（the fourfold canon）における、四（*four*）という特徴的な数は、その規範（the canon, diesen Kanon）が早期ギリシアにおいて使われている市民の徳の理想（the ideals）の名残であることを証明するのであって、なぜならわれわれはそれ〔= その規範〕が早くもアイスキュロスに述べられているのを見つける。《156》

＜注記と考察＞

(1) ここでは teach (erziehen) を「教育する」と訳しておく。

(2)「ソークラテースが真の教師の職務とその難しさについて彼の同時代者のだれより

もはるかに高度な考え方（a far higher idea）を持っていること」（that Socrates has a far higher idea of the real teacher's task and its difficulty than any of his contemporaries）は、ドイツ語版では「その他の人びとには想像もつかない、真の教育の任務とその困難の大きさの意識（ein Bewußtsein von der Aufgabe der wahren Erziehung und der Größe ihrer Schwierigkeit, von der die übrige Welt nichts ahnt.）」となっている。

(3) ἔρως（エロース）：「愛」

(4) ἀρετή（アレテー）。ここでは「すぐれていること」「優秀」「完全性」「美徳」という意味。

(5) ソークラテースの「教育愛」と、非凡な若者たちの「パイデイアー」を渇望する気持ちとの呼応の関係、および教養・教育というものの根源的な必要性について考えさせられる。

(6) エウテュデーモスが所持している図書のことに関連しては、本継続研究 (5) II. 6. の＜注記と考察＞(7)（論文ページ 135）を参照のこと。

(7)「知識（knowledge）」は英訳で加えられたもの。

(8) ここでは、「エウテュデーモスは、正義（justice, der Gerechtigkeit）、不正（injustice, Ungerechtigkeit）の本質についての詰問（a crossexamination, ein Verhör）に引き込まれる」という様子に光が当てられている。イェーガーはそこに、「自分自身の無知の認識」と「自己認識（self-knowledge, der Selbsterkenntnis）」、つまり「自分自身の力の認識（the knowledge of his own powers, der Erkenntnis der eigenen Kräfte）」という二つの重要事があると述べている。「自分自身の力（his own powers, der eigenen Kräfte）」は「自分自身の能力」と訳してもよい。ソークラテースの論理的な（理性的な）対話に引き込まれて、一人の青年（対話の相手）の内部において彼自身の精神（魂）が生き生きと働き始めていく。ソークラテースの教育実践を考えさせる重要な内容となっている。

(9) ドイツ語版ではここに「その点ではわれわれの証人の間にはほぼ完全な一致がある（完全な一致が支配的である）。」の一文が入っている。

(10) status：「立っている状態」「個人の立場」「道徳的、政治上の立場」「社会的地位」「国・社会の体制、状況、構造、組織」といった意味をもつ。

(11) イェーガーの、この段における「このこと〔=（前文の歴史経緯）〕はギリシア都市国家の生活においては統合されていた二つの要素を分離するだけではなく、それ〔=（前文の歴史経緯）〕はその倫理（ethics, des Ethischen）と政治（politics, Politischen）の意味そのものを変える。」ということの説明は、古代思想の理解にとってきわめて重要であろう。イェーガーの説明は、本継続研究 (19) II. B. 12. の＜注記と考察＞(13)(16)（論文ページ 10，11）で目を向けた『岩波　哲学・思想事典』の【古典古代における自由】の記述について、さらに深く考察することを促す。

　またイェーガーの説明は、本継続研究において繰り返し論究してきている勝田守一の『能力と発達と学習――教育学入門 I』（1964 年）、『政治と文化と教育――教育学入門 II』（未完、1968 年 4 月～ 6 月）の本質的理解に関わってくるだろう。とくに『教育学入門 II』の構想理解に関わってくるはずのものである。なおイェーガーの『パイデイア』と勝田の『教育学入門 I・II』との関連については、本継続研究 (14) IV. 1) オ）「イェーガーは『パイデイア』をプラトーンの叙述で完結させている」（論文ペー

ジ 189）を参照のこと。

15.（項見出しは本継続研究 (25) で記入する）
＜訳文＞ 62p ～ 70p

〖**ソーラテースの「エレンコス（吟味、論駁）」は「熱心な勧告」になくてはならない補足物である**〗プラトーンの対話篇は、ソークラテースの働き（work, Tätigkeit）のある側面、それはクセノポーン（の描写：Darstellung）においては彼〔= ソークラテース〕の他者を鼓舞し（encouraging, anfeuernden）忠告する（admonishing, ermahnenden）活動（activity）によってほとんどまったく隠されているのであるが、を明らかにしている。それは、エレンコス（the *elenchos,* den Elenchos）、[(1)] 彼の対話者を吟味することや論駁すること（his crossexamination and refutation, das widerlegende und prüfende Gespräch 論駁し吟味する対話）である。しかしながら、プラトーンによるソークラテースの発言（speech, Rede）の通常の型（patterns, Formen）の描写が示しているように（p.38）[(2)]、この試問（examination）は熱心な勧告（the exhortation, der Mahnrede 勧告の発言）になくてはならない（necessary, notwendige 不可欠な）補足物である：（というのは：denn）それ〔= この試問〕は、試問される者に彼〔= 試問される者〕の知識（knowledge, das Wissen）が想像に過ぎないことを証明することによって、種子の準備で土壌をほぐす。

〖**ソークラテースの‘魂の世話をする（take care of the soul, Seelsorge）’ことへの勧告のエネルギー（the energy of his adjurations, seine Mahnung 彼の勧告）の中には、理性（the logos, des Logos）の力に拠る倫理性（morality, des Sittlichen）の本質を見出そうとする努力に通じるものもあった**〗これらの吟味（cross-examinations, die elenktischen Gespräche）はどんなときでも同じ方針に従って進む。それら〔= これらの吟味〕は、‘勇気’や‘正義’のような道徳規範（a moral standard, sittlicher Werte 道徳的価値）を描写する特定の名称の基礎となる普遍的な概念（the general concept, den allgemeinen Begriff）を見出そうとする、度重なる試みである。質問の形式（‘勇気’とは何か？）は、吟味（investigation）の目的が定義（a definition, die Definition）を見出すことにあるということを示しているように見える。アリストテレースは、概念の定義はソークラテースの功績（an achievement, eine Errungenschaft 偉業）であったとわざわざ言い、《157》クセノポーンもまたそう言っている。《158》もしかりに本当だとすれば（if true）、このことはわれわれがこれまで作り出してきた画像に重要な新しい特徴をつけ加えることになるだろう：それ〔= 重要な新しい特徴〕はソークラテースを論理学（logic, der Logik）の創案者にするであろう。このことに、彼が概念の哲学（the philosophy of concepts, der Begriffsphilosophie）の祖であるという古くからの見方は、基づいている。ところが最近 H. マイヤーは、アリストテレースとクセノポーンの証言（the evidence, Zeugnisses）に異議を唱え、それは単純にプラトーンの対話篇に由来するということを、またプラトーンは単純に自分自身の学説（doctorine, Lehre）を詳述しているということを、証明しようと努めてきた。《159》この主張に従えば、プラトーンは新しい知識の概念（conception of knowledge, Wissensbegriffs）の輪郭をソークラテースに見出し、そうしてそれら〔= 新しい知識の概念の輪郭〕から論理学（logic, die Logik）と抽象的な概念（the abstract concept, den Begriff）を発展させた；ソークラテースは、倫理的自律性（moral

independence, der sittlichen Autonomie）の勧告者（an exhorter、der Protreptiker）、[(3)] 予言者（a prophet, der Prophet）[(4)] にすぎなかった。しかしながらこの見方を認めることには、ソークラテースが（すでに：schon）イデア論（the theory of Ideas, die Ideenlehre）を教えたという、その〔=（マイヤーの見方の）〕反対を確信するのとまったく同じような、多くの困難がある。《160》アリストテレースとクセノポーンの証言（evidence, Zeugnis）はただプラトーンの対話篇から採られただけだということは、証明不可能だしありそうもない。《161》われわれがもっている証言（evidence, Überlieferung 伝承されてきたもの）は、ソークラテースを、問答（dialectic, der Dialektik 討論）――問いと答えの形式（question-and-answer form, Form von Frage und Antwort）での対話（conversation, der Unterredung）――の技術、クセノポーンはその技術を彼の勧告の活動（his protreptic activity, der Protreptik）のそれ〔= 技術〕ほどには評価しないのであるが、その問答の技術の無敵の大家として描写することに同意している。概念を定義しようとするこれらの試み（these attempts to define concepts, dieser Begriffsbestimmungsversuche）の目的と意味は何であろうかということは別個の問題である；しかしソークラテースがそれ〔= 概念を定義しようとするこれらの試み〕をしたということ（そのもの：als solcher）は疑いようがない。われわれは、もしわれわれが彼は全くの抽象概念の哲学者（a philosopher of abstractions, Begriffsphilosophon）であるという伝来の見解を採るとすれば、われわれは何故彼の弟子アンティステネース[(5)] がひたすら倫理学（ethics, Ethik）と道徳の熱心な勧告（moral exhortation, Protreptik）に打ち込んだかを理解できないだろう、ということを認めなければならない。しかしこれに反して、もしわれわれが彼の教えを‘倫理的意思の福音（gospel of the moral will, das Evangelium des sittlichen Willens）に限定するならば、われわれはプラトーンのイデア論（Plato’s theory of Ideas, der platonischen Ideenlehre）の由来を、またプラトーン（自身：selbst）がそれ〔= プラトーンのイデア論〕をソークラテースの‘哲学的思索（philosophizing, Philosophieren）’と緊密に結びつけているという事実を、理解できない。[(6)] このジレンマからの逃げ道はただ一つである。われわれは、ソークラテースが倫理的問題（the ethical problem, das ethische Problem）に着手する形式（the form, die Form）[(7)] が予言的メッセージ（a prophetic message, Prophetie 予言）、圧倒的な倫理的説教（an overwhelming moral preachment, eine sittlich aufrüttelnde Predigt 倫理的に目覚めさせる説教）であったということだけではなく、‘魂の世話をする（take care of the soul, Seelsorge）’ことへの彼の勧告のエネルギー（the energy of his adjurations, seine Mahnung 彼の勧告）の中には、理性（the logos, des Logos）[(8)] の力に拠る倫理性（morality, des Sittlichen）の本質を見出そうとする努力に通じるものもあったということも、認めなければならない。

〖ソークラテースのことばとしての問答法（the method, die „Methode“）には論争的側面があったが、プラトーンの対話篇からは、その論争的な知的「勝負（the game）」で問題となっている真の対象についての、ソークラテースの深い真剣さと全精神の集中とがありありと伝わってくる〗ソークラテースの対話（dialogue, Dialogs）の意図は、他者との、関与しているすべての者にとって比類なく興味深い主題――すなわち、人間の生活（human life, des Lebens）における最高の価値（the highest values, die höchsten Werte）――についての論議に拠って、だれにも確かだと認められるに違いない合意が

成立することである。この結論に到達するために、ソークラテースはいつも、彼の対話者に拠って、または一般の人びとに拠って、認められていることがらから出発する。この承認（admission, Zugeständnis 認容）は、‘仮定（hypothesis, Hypothesis）’[(9)]、基礎（the foundation, „Grundlage“）として用いられる。それから論議は、仮定から当然の結果として生じるものを導き出し、それからこれらの発見物を、われわれが確立されているのを知っている他の諸事実（facts, Tatsachen）によって試す。それゆえに、問答的な前進（the dialectic advance, des dialektischen Denkfortschritts 討論術的思考の前進）において本質的な要素は、われわれがある限定された立言（statements, Sätze 立論）に論議の基礎を置くときにわれわれに立ちはだかる、諸矛盾（the contradictions, der Widersprüche）の発見である。これらの矛盾はわれわれに、われわれが真実だとしてきた判断の正しさを調べ直させ、また時にはそれらを修正ないし放棄させる。この全過程の目的は、倫理規範（standard）の領域における個々の現象を一つの至高の普遍的規範（one supreme general standard, einen höchsten allgemeinen Wert 至高の普遍的価値）に還元することである。しかしソークラテースは自身の研究において、この‘善それ自体（Good in itself, Guten an sich）’を探すことから出発はしない。（そうではなく：sondern）彼は個別の倫理的特性（quality, Eigenschaftsworte 形容詞）の名で表示されるいくつかの‘美徳（virtue, Tugend）’――たとえばわれわれが勇敢（bravery, tapfer 勇敢な）や正義（justice, gerecht 正義の）と呼ぶ性質――で始める。このように、『ラケース』には、‘勇気（courage, Tapferkeit）’とは何かを見つけ出そうとするいくつもの試みがある[(10)]；しかしそれについてなされる立言（the statements, dieser Sätze）は、次から次へと中止されざるを得ないのであって、なぜならそれらはめいめい、勇気（courage, der Tapferkeit）の本質をあまりにも狭く、あるいはあまりにも広く表現しているのである。クセノポーンの『言行録』における、正義（justice, die Tugenden 美徳）についてのソークラテースのエウテュデーモスとの論議は同じ道筋をたどる。《162》これは（this, hier この場合）、つまり、ほんとうに歴史的なソークラテースの問答法（the method, die „Methode“）[(11)] である。‘問答法（method）’という言葉は（確かに：zwar）手続き（the procedure, des Verfahrens）の倫理学的な（ethical, ethischen）意味を表すには十分ではない。しかし（but, aber）それ〔= 問答法〕はソークラテースのことば（a Socratic word, sokratischen Ursprungs ソークラテースに由来するもの）であり、偉大な吟味者の接近法（the great cross-examiner’s approach, Vorgehen des großen Fragevirtuosen）の適切な表現であり、それはまったく彼の持ちまえのものであったが、技術へと（into an art, zur Kunst）磨かれていたものである。外面的にはそれは、ほぼ同じ頃に技術（an art, Kunst）の部類へと発展させられた、非常に危険な教養的なすぐれた腕前（a very dangerous cultural skill, einer sehr bedenklichen Kulturblüte 非常に危険な教養の俊秀）――勝利を収める論争（winning disputations, Wortgefecht 論争）におけるすぐれた腕前（skill, Meisterschaft）――と容易に混同されるかもしれない。しかもソークラテースの対話（conversations, Gesprächen）には、‘論争家（eristics, Eristik）’に非常に愛されている、人の興味を引くような論議（the catch-arguments）をわれわれに思い出させる、そのような論議（argument）の勝利が多くある。われわれは、彼の問答の技術（dialectic, der Dialektik 討論術）における言葉の競技の純粋な愛好（the pure love of verbal competition, der reinen Disputierlust 純粋な論争の喜び）を過小評価してはいけ

ない。プラトーンはそれ〔= 彼の問答の技術における言葉の競技の純粋な愛好〕の真に迫った描写を示しており、したがってわれわれは、何故（イソクラテースのような）ソークラテース学派に属していないライバルたちないし同時代人がソークラテースの学徒たちをあっさりと職業的な論争家（professional arguers, professionelle Streitredener 職業的な争論家）と呼ぶことができたのかを確かめることができる。《163》このことは、ソークラテースの問答法（method）における論争的側面を他者がいかにつよく意識していたかを教える。しかし、それでも、彼ら〔= ソークラテース学徒たち〕のこの新しい知的競技（intellectual gymnastics, geistigen Athletik）の戯れの楽しみにもかかわらず、彼らのソークラテースの確信したしなやかな理解力に対するスポーツのような熱狂にもかかわらず、プラトーンの対話篇は勝負（the game, dem Spiele）で問題となっている真の対象についての、深い真剣さと全精神の集中によって支配されている。

〖ソークラテースはいくつかの美徳の定義をしようとしたのではなく、「徳（areté, die Arete）は結局のところ知識（knowledge, ein Wissen）であるにちがいない」ということを理性的に証明しようとしている〗ソークラテースの対話（dialogue, Gespräch）は、倫理的問題についての論理学的な定義の何か新しい技術の実践（the practice, üben）なのではない。それ〔= ソークラテースの対話〕は、正しい行為に到達するために理性（the logos, des Logos）によって採用される、単なる μεθοδος (Methode) 、‘方法’（‘way’, der Weg）でしかない。プラトーンのものによるソークラテースの対話（dialogues, Dialoge）のどれも、それ〔= ソークラテースの対話〕が吟味しつづけている倫理的な概念に対する実際の（real, wirklich）定義の発見に至っていない――事実、それら〔= ソークラテースの対話〕はいかなる成果（result）もまったくもたらさずに終わっていると長い間思われていた。しかしそれらは一つの成果（a result, ein Ergebnis）に（実は：tatsächlich）到達したのであって、もっともそれ〔= 一つの結果〕は、われわれは、われわれがいくつかの対話（dialogues, Dialoge）を総合し、それからそれら全部に特徴的なものをなんとか理解するまでは、看破できないのであるが。特殊な美徳（virtue, Tugend）の本質の範囲を限定し（define, „begrenzen“）(12) ようとするこれらすべての試みは、それは一種の *knowledge* (eine Erkenntnis)（知識）(13) であるに違いないという結論に終わる。ソークラテースは、いくつかの美徳の間の区別――つまりそれぞれの定義――というよりはむしろ、それらすべてが共有している共通要素つまり‘美徳それ自体’を大事にしている。それぞれの会話の最初から、これが知識の類（a sort of knowledge, einem Wissen）となろうという暗黙の予想ないし仮定が、討論（discussion, der Untersuchung）に絶えず付きまとっているように思われる：というのは、質問者が実際に善（good, des Guten）の達成という彼の目標により近くになることを望まなければ、倫理的な問題（an ethical problem, des ethishen Problems）を解くことに対しこのたいへんな知的（mental, verstandesmäßige 理性的）エネルギーを費やして何になったであろう？それにもかかわらず、このソークラテースに拠って抱かれたこの信念は、倫理の歴史をとおして通例であり続けてきた見解に相対している。たいていの人は、人間はあまりにもしばしば自分がなすべきことを全く十分に分かりしかも悪いこと（what is wrong, das Schlechte）をしようと決心する、と思ってきた。《164》それをわれわれは道徳的な弱さ（moral weakness, sittliche Schwäche）と呼ぶ。《165》ソークラテースの論証（arguments, die Beweisführung）が、

徳（areté, die Arete）は結局のところ知識（knowledge, ein Wissen）であるにちがいないということを証明するように説得力をもって感じられれば感じられるほど、また彼の弁証法的な吟味（his dialectic investigations, die dialektische Bemühung）がその相当な成果の見込みをもって熱心に推し進められれば推し進められるほど、成果に到達するこのやり方は、疑わしく思う観察者には、それだけいっそう逆説的に見えるに違いない。

＜注記と考察＞

(1) ἔλεγχος（エレンコス）：「反駁、論駁」「吟味、試験、探究」などの意味がある。

(2) 指示されている p.38 には、次のような叙述がある（本継続研究 (10) II. B. 5.「フィロソフィー＝一つの精神課程としての「熱心な勧告」と「厳しい試問」」（論文ページ 19）

『弁明』においても『プロータゴラース』においても、プラトーンはわれわれに、ソークラテースの語りの二つの基本的な装置（two basic devices, zwei Grundformen）――熱心な勧告 exhortation, die protreptische）と厳しい試問（examination, die elenktische）――は基本的にお互いに同種のものである、ということを教えている。

(3) προτρεπτικός：「勧告する」

(4) προφήτης：「予言者」

(5) アンティステネース：前 455/444 頃～前 365/360 頃。ギリシアの哲学者で、「キュニコス Kynikos（犬儒）派の祖と目される」ということである。アンティステネースについては本継続研究 (7) の論文ページ 45、本継続研究 (12) の論文ページ 213、本継続研究 (13) の論文ページ 10 ～ 11、で注記しているが、イェーガーのここの論述を理解するために、重ねて松原著よりその一部を下記に引いておく。

初めゴルギアースに学び、教師をしていたが、のちソークラテースの熱心な弟子になる。ソークラテースにめぐり会うや教室を閉じ、「諸君、それぞれの師を捜すがよい。私は今その人を見つけたのだ」と門弟たちに告げたという。ソークラテースの禁欲的で質実剛健な実践面を継承し、師の刑死（前 399）後、アテーナイ郊外のキュノサルゲスのギュムナシオン（体育場）で教えた。「幸福は徳に、徳は知識に基づくが故に、徳は教え得る」と説き、富や名誉や快楽を蔑視、無欲にして自ら足れることを志した。

(6) イェーガーが指摘する、ソークラテースの「倫理的意思の福音」と「哲学的思索」とプラトーンの「イデア論」との緊密な関連性は、わたくしたちがプラトーンの諸対話篇を読むときに感じる印象そのものである。

(7)「ソークラテースが倫理的問題（the ethical problem, das ethische Problem）に着手する形式」とは、「問いと答えの形式」のこと。

(8) λόγος（ロゴス）には多くの意味合いがあるが、そのことを前提に、ここでは「理性」という訳を当てておく。

(9) ὑπόθεσις（ヒュポテシス）：「根底、基礎、根本原理」「前提、仮説、仮定」といった意味をもつ。

(10) プラトーンの『ラケース――勇気について――』は、諸対話篇の‘前期’に属するものとされている。その後段では、徳の一部として、「勇気とは何であるか」という

問いが設定されて対話が重ねられている。『プラトン全集 7』（岩波書店、1975 年）の訳者の「『ラケス』解説」には、次のような説明がある。

この作品は、倫理的諸問題について、対話者を吟味して無知の自覚に至らしめるという、いわゆるソクラテス的吟味の行なわれているさまを描いた作品の、典型的一例であると言えよう。しかしまた対話者の提示する答えが批判吟味されてゆく過程の中に、ソクラテスないしプラトンの積極的な見解や観点も示され、またソクラテスの問答法の特徴も示されている。

(11) the method (die „Methode“) を「問答法」と訳しておいた。

(12) begrenzen は「(･･･ の）境をなす」「制限する」「限定する」などの意味をもつ。define は「定義する」「意味を明確にする」「･･･ の境界を定める」「範囲を限定する」「･･･ の輪郭をはっきりさせる」などの意味をもつ。

(13) knowledge (eine Erkenntnis) は「知識」（「認識」）。ギリシア語の ἐπιστήμη あるいは γνῶσις に対応している。

（継続研究 (25) へ続く）

≪原文注記≫

143. 彼はゴルギアース、[(1)] プロディコス、[(2)] ヒッピアース [(3)] は当代のパイデイアーの典型的な代表者たちであると考えた：プラトーン『弁明』19e.[(4)]

144. プラトーン『弁明』19d-e：οὐδέ γε εἴ τινος ἀκηκόατε ὡς ἐγὼ παιδεύειν ἐπιχειρῶ ἀνθρώπους, ･･･οὐδὲ τοῦτο ἀληθές.[(5)]

145. クセノポーン『言行録』4.7.1，3.1.1-3.[(6)]

146. プラトーン『弁明』25a，『メノーン』92e.[(7)]

147. プラトーン『弁明』19c を参照のこと。彼はそこで、もしだれかがほんとうに‘人を教育する（to teach men, Menschen zu erziehen)’ことができるならば、それは結構なこと（admirable, etwas Schönes）だろう、と言う、がしかし彼が‘ゴルギアース、プロディコス、それにヒッピアースのように’をつけ加えるとき、続く叙述から明らかなように、それ〔=（前文の趣旨)〕はソークラテース的アイロニー（Socratic irony, das sokratische Ironie）である。[(8)]

148. クセノポーン『言行録』4.1.2.[(9)]

149. クセノポーン『言行録』4.1.3-4.[(10)]

150. クセノポーン『言行録』4.1.5.[(11)]

151. クセノポーン『言行録』4.2.[(12)]

152. クセノポーン『言行録』4.2.4[(13)]

153. クセノポーン『言行録』4.2.11.（2.1.17〔以下は英訳版で追加されたもの〕そして 3.9.10 を参照のこと）[(14)]

154. アリストテレース『形而上学』A6.987b1.[(15)]

155. アリストテレース『ニーコマス倫理学』1.1.1094a27 と 10.10，とくにお終い。[(16)]

156.『パイデイア』I.106，注 27. を参照のこと。[(17)]

157. アリストテレース『形而上学』A6.987b1. と M3.1078b18. および 27.[(18)]

158. クセノポーン『言行録』4.6.1.[(19)]

159. マイヤー、*Sokrates* 98 f.、は、ソークラテースが一般概念（universals, des Allgemeinbegriffs）を見出しまた諸概念を定義しようとしたというアリストテレースの言明はクセノポーン『言行録』4.6.1 に由来すると確信している。；クセノポーンはこれをプラトーンの後期の弁証法的な対話篇『パイドロス』『ソフィスト』『政治家』から受け取った、と彼〔= マイヤー〕は考えている（彼の p.271 を参照）。
160. それは J. バーネットと A. テイラーの見解である：25, 26 頁を参照。[20]
161. マイヤーの著作の私の評論 *Deutsche Literaturzeitung* 1915,pp.333-340 と 381-389 における、彼の証言（the evidence）の伝送（the transmission）に関する仮説および彼のソークラテースの哲学の論理的側面の否定についての、私の批判（my criticism, meine Kritik）を参照のこと。〔**以下は英訳版で追加されたもの**〕E.Hoffmann と K.Praechter の批判は同じ問題点を攻撃した。
162. クセノポーン『言行録』4.6[21]
163.『パイデイア』III. 56 を参照のこと [22]
164. このことはプラトーンによって『プロータゴラース』355a-b. において見事に表現されている。[23]
165. ギリシアにおいてはそれは、‘快楽に負ける（giving way to pleasure, der Lust unterliegen）’、ἡττᾶσθαι τῆς ἡδονῆς、と呼ばれている：『プロータゴラース』352e を参照のこと。『プロータゴラース』353c では、ソークラテースの注意力はまさにこの点に向けられている：すなわち、この弱さ（this weakness, dieser Schwäche）の真の本質を見出すことに。[24]

＜注記と考察＞

(1) ゴルギアース：前 485 頃～前 380 頃。ギリシアのソフィスト、弁論術の大家。本継続研究 (6)II. 9（← 3）＜注記と考察＞ (2)（論文ページ 268）を参照のこと。
(2) プロディコス：前 470/460 頃～前 399 以降。ケオース出身の文法家、ソフィスト。本継続研究 (11)III. 2.1. ＜注記と考察＞ (8)（論文ページ 164）を参照のこと。また本論文の「考察ノート⑯」の、クセノポーン『言行録』からの引用を参照のこと。
(3)（エーリスの）ヒッピアース：前 481 頃～前 411 頃。ギリシアのソフィスト。本継続研究 (16)II. B.10. ＜注記と考察＞ (4)（論文ページ 38）を参照のこと。
(4)『弁明』19e. は、下記のとおりである（久保訳、岩波文庫、に拠る）。

（四）明らかにこれは事実無根である。また諸君が誰かの口から、私が自ら僭して人を教育する（παιδεύειν, teach）と称し、しかもこれに対して謝礼を要求すると聞かれたならばそれもまた同じく真実ではない。もっとも人が他を教育する能力を持っている（εἴη παιδεύειν ἀνθρώπους, be able to teach people）ならば、謝礼を受けるのは結構なことと自分にも思われる。例えばレオンティノイ人ゴルギヤスやケオス人プロディコスやエリス人ヒッピヤスがそれである。諸君、これらの人はいずれもその好むところの都市に行って、そこの青年を捉え、もともとその同市民の誰とでも欲するがままに無報酬で交わることの出来る彼らを説得して、その同市民との交際を捨て、報酬を払って己に来らしめ、しかもさらにこれを感謝させることが出来るほどの技倆を持っているのである。

(5)『弁明』19d-e は（その前後､b,c, を含めて）下記のとおりである（久保訳）。なおイェーガーがギリシア語で指示している箇所は、下記引用文中に太字で挿入しておく。

（三）私達はまず出発点に帰り、そうして私に対する悪評を喚起せる罪状――メレトスもまた確かにこれを信じて私に対する訴訟を提起するに至ったところのもの――は何であるかを問うことにしよう。それでは私の誹謗者らが誹謗するところは何であるか。私達は先ず、彼らを普通の告発者と見なして、彼らの訴状を読みあげなければならぬ。曰く、「ソクラテスは不正を行い、また無益なことに従事する、彼は地下ならびに天上の事象を探究し、悪事をまげて善事となし、かつ他人にもこれらの事を教授する（διδάσκων, teaching）が故に」。彼らのいうところはほぼかくの如きものである。実際それは諸君自身もアリストファネスの喜劇において親しく見聞せられたに違いない。そこではソクラテスなる男が舞台を歩き廻って、あるいは空中を飛行し得ると自称し、あるいは、多くといわず少なくといわず徹頭徹尾私の理解せざる事物について外にも多くの妄語を弄するのである。もとより私がこういうのは､仮にこの種の事象に通暁せる人がありとすれば､そういう知識（ἐπιστήμην, knowledge）を軽蔑するためではない。私はただメレトスからかくも重き罪状に問われることを心外とするのである。アテナイ人諸君、この種のことは私の全然感知しないところである。その証人として私は諸君自身のうちの大多数を挙げる、そうしてかつて私の対話（διαλεγομένου, conversing）を傍聴したことのある諸君は――そういう人が諸君の中に沢山あるはずである――互いに語り合い告げ合われんことをお願いする。すなわち諸君の中の一人でも、それが簡単であれ詳細であれ、私がかつてこの種の事物について語るのを聴いたことがあるかどうか、諸君の間において互いに語り合われよ。しからば諸君は､衆人が私について爾余の噂もまた同様のものであることを悟られるであろう。

（四）明らかにこれは事実無根である。また諸君が誰かの口から、私が自ら僭して人を教育すると称し、しかもこれに対して謝礼を要求すると聞かれたならばそれもまた同じく真実ではない（**οὐδέ γ’ ἔι τινος ἀκηκόατε ὡς ἐγὼ παιδεύειν ἐπιχειρῶ ἀνθρώπους**, καὶ χρήματα πράττομαι, **οὐδὲ τοῦτο ἀληθές.**, and if you have heard from anyone that I undertake to teach people and that I make money by it, that is not true either.）。もっとも人が他を教育する（παιδεύειν, teach）能力を持っているならば、謝礼を受けるのは結構なこと（καλὸν, a fine thing）* と自分にも思われる。例えばレオンティノイ人ゴルギヤスやケオス人プロディコスやエリス人ヒッピヤスがそれである。諸君、これらの人はいずれもその好むところの都市に行って、そこの青年を捉え、もともとその同市民の誰とでも欲するがままに無報酬で交わることの出来る彼らを説得して、その同市民との交際を捨て、報酬を払って己に来らしめ、しかもさらにこれを感謝させることが出来るほどの技倆を持っているのである。

* καλός には「（皮肉、逆説的に用いて）立派な、結構な」という意味がある（fine も同様）。

(6)『言行録』4.7.1 は下記のとおりである（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。

ソークラテースが自分の考えをきわめてわかりよく、門下に集まる人々に説い

ていたことは、すでにのべたところから明瞭であると思う。ところで、彼はまた、弟子たちが自分の要務を自力でやれる人間になるように、留意したのであって、これをここに述べてみよう。じっさい私の知っている人々のうちで、彼ほど自分の弟子たちのおのおのがいかなる知識があるか、これを知ろうとつとめた者はなかったのであり、そしてまた、君子たる者が知るにふさわしい事物は、もし自分が知っておれば、誰よりも熱心にこれを教え（ἐδίδασκεν, taught）、もし自分のよく知らぬ問題であれば、これを熟知する人々の所へ弟子たちを連れて行ったのである。

また 3.1.1-3 は下記のとおりである。

立派な地位をあこがれる人々には、彼は、そのあこがれるところのものに精励させるようにして助けとなったことを、私はここでのべて見よう。

あるとき、ディオニューソドーロスがアテーナイへ来て将軍学を教える（διδάξειν,teach）と発表したのを聞いて、彼は弟子の中で一人、この地位を国家から得ようと希っている者があるのを知っていたので、この青年にむかってこう言った。

「若い君、国家のために将軍となろうと欲している者が、これを学ぶこと（μαθεῖν, learning）ができる折りにそれを放っておくのは実に恥である。そして、こうした人間は当然、彫刻の技術を学ばずに彫刻を作る人間よりも、はるかにはげしく国家から罰を受けてよろしかろう。なぜかというに、戦時の危険状態にあっては、全国家が将軍の手に委ねられるのであって、彼が見事に事を行なうときは偉大な利益を生み、彼が誤るときは非常な禍を招くといっていいからだ。されば、これを学ぶことを心がけないで、懸命に選出されることを希う者が、罰を受けないでどうしてよいことがあろう。」

(7)『弁明』25a はソークラテースがメレトスに反論して詰問する場面であり、次のとおりである（久保訳）。

ヘラの神かけて、これは聴きものだ。すると善導者は随分沢山なわけだ。それではもっと伺いたいが、ここの聴衆もまた彼らを善導するのか、それともしないのか（οἵδε οἱ ἀκροαταὶ βελτίους ποιοῦσιν ἢ οὔ, Do these listeners make them better, or not?）。

「彼らも同じことだ。」

では、参政官は？

「参政官も同じこと。」

メレトス君、でも国民議会の議員たちは、青年を腐敗させているようなことはないか。それとも彼らも皆青年を善導するのか。

「彼らも同じこと。」

すると、私を除いたアテナイ人はみんな彼らを善良かつ有徳にするのに、ただ私ばかりが彼らを腐敗させるように見えるね。君の説はそうなのか。

「いかにも、私の説はその通りである。」

『メノーン』92e は下記のとおりである（藤沢訳、岩波文庫、に拠る）。

ソクラテス　いや、そうした事柄の教師だとぼくが思っていた人たちのことな

ら、ちゃんと言ったよ。* ただあなたの主張によると、ぼくの説はまったくまちがっているというわけだ。そしておそらく、あなたがそう言うのは一理あるだろう。さあこんどは、彼がアテナイ人のなかの誰のところへ行けばよいのかを、あなたが言う番だ。誰でも、これはと思う人の名を挙げてもらえないだろうか。

アニュトス　しかし、どうしてとくにひとりの人の名を挙げなければならないのだね。アテナイ人でひとかどの立派な人物（τῶν καλῶν κἀγαθῶν, gentleman）なら、そのなかの誰と出会っても、ソフィストたちよりは彼をすぐれた人間にする（βελτίω αὐτὸν ποιήσει, will do him more good）ことはまちがいないだろう。彼がその言葉にしたがう気になるならね。

ソクラテス　いったい、そのひとかどの立派な人物たちというのは、ひとりでにそういう人物になったのだろうか――誰からも学ば（μαθόντες, learning）ないのに。しかも、自分が学びもしなかった事柄を、他人に教える（διδάσκειν, teach）ことができるのだろうか？

* 具体的な内容は、下記の 90d に該当すると判断される。

ソクラテス　では、もういちど同じことについて、次のことに答えてもらいたい。この人を医者にするつもりなら、医者たちのところにやるのが当をえたやり方だろうと、こうわれわれは主張している。いったい、そのようにわれわれが言う場合、意味するところはこうなのだろうか。つまり、われわれが賢明な処置として、彼をそのもとへやってしかるべき人々というのは、自分が問題の技術の専門家（τῆς τέχνης, the art）であると主張していない人々より、むしろそのように主張している人々であり、また、誰でもそのもとにおもむいて学び（μανθάνειν, learn）たいと思う者があれば、自分がそういう希望者の教師であることを公表したうえで、まさにその仕事のために報酬を取りたてるような人々のことなのである、と。――われわれが彼をつかわすのが当をえたやり方だということになるのは、こういったことを考慮に入れているからなのではないだろうか？

(8)『弁明』19c は前記 (5) を参照のこと。

(9)『言行録』4.1.2 は下記のとおりである（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。

たとえば、彼はよく誰それを愛している（ἐρᾶν, in love）* ということを言ったが、しかしそれは決して、肉体が青春美を現わしている者にこがれるということではなく、精神が美徳をこのむように生まれついた者（τὰας ψυχὰς πρὸς ἀρετὴν εὖ πεφυκότων ἐφιέμενος, whose souls naturally inclined to excellence）を、愛慕する意味であるのが、明白であった。彼はこうした美質を、己れの学ぼうとするところを習得する（μανθάνειν, learn）速さ、学んだことを記憶する力（μνημονεύειν, ability to remember）、そして一切の、すなわちそれによって立派に家を斉え、国を治め、要するに、人間（ἀνθρώποις, people）ならびに人間関係のことがら（ἀνθρωπίνοις πράγμασιν, people’s affairs）を見事に処理することのできるあらゆる知識を、知ろうと求める熱意（ἐπιθυμεῖν, desire for）から、見ぬいたのであった。なんとなれば、こうした人々は、教育されたとき、ただに自分が幸福（εὐδαίμονας, happy）となり、自分の家をよく治めるばかりでなく、他の人々（ἄλλους ἀνθρώπους, other people）および国家（πόλεις, states）をも幸福にすることができると、彼は考えたからで

ある。

＊次のような訳注がある。

愛している――erân. 愛関係にあること。クリティアースがエウテュデーモスを愛し（1 ノ 2 ノ 29）、クセノフォーンの『饗宴』の主人カルリアースがアウトリュコスを愛し、クリトブーロスがアルキビアデースの息子を愛して師に説教されている（本書 1 ノ 3 ノ 8）。ギリシャ倫理史における普通の問題であった。

(10)『言行録』4.1.3-4. は下記のとおりである（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。

しかし、すべての者に同一の筆法で近づいたのではなかった。天賦（φύσει, natural endowments）のゆたかなのを自信して学問（μαθήσεως, learning）を侮る人々には、天賦がゆたかならゆたかなだけ教育（παιδείας, education）の必要は大きいと教え、そして素質のよい烈火のような悍馬も、仔馬の頃から訓練すれば有用な無比の名馬となるのであるが、訓練をほどこさぬならば手に負えぬ悪馬と堕してしまうものであり、また素質のよい犬で、よく働き、獲物を追うに熱心な犬も、よく仕込めばこそ優秀な猟犬となり、この上もなく有用なものとなるが、訓練せずにおかれたなら馬鹿な気狂い犬の不良犬となることを、指摘して聞かせたのである。

おなじように人間も、すぐれた天賦をそなえ、強大な精神力と、何をしようともこれを成し遂げる器量のある者が、訓育（παιδευθέντας, educated）を受け、なすべきことを学習（μαθόντας, taught）するならば、きわめて優秀なきわめて有用な人物（ὠφελιμωτάτους γίγνεσθαι, useful men）となるであろう、なんとなれば、無数のしかも偉大な善事が成し遂げられるからである。しかるに訓育もうけず（απαιδεύτους, untrained）、ものも学ばぬ（ἀμαθεῖς, untaught）においては、極悪無頼の徒と化するであろう、なんとなれば、己のなすべきことを識別する道をわきまえず、しばしば悪事に手を染め、高大の資性と精悍の気象のゆえに、手に負えぬ矯正しようのない人間となるからであって、これによって無数のしかも最大の禍いが＊醸し出されるのである。

＊次のような訳注がある。

無数のしかも最大の禍が――Marchant の脚注に「アルキビアデースのことを考えていたのか」とある。

(11)『言行録』4.1.5. は下記のとおりである（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。

しかし己れの富（πλούτω, riches）に誇り、教育（παιδείας, education）を受ける必要はさらにないと考え、富の力によって充分れの欲するところを達し、かつ世人の尊敬を得ることができると信じている人々には、次のように言って訓戒を与えた。すなわち、物事の有用なるものと有害なるものとを、学ばずして弁別し（διαγνώσεσθαι, distinguishing）得ると思う者があるなら、これは阿房というものであり、またこれを弁別することなくして、しかも富の力によって己れの欲するものすべて手に入れ、為になることを行なう力なくしてよく仕合わせている＊と考えたり、自分の生活に対して立派なかつ充分な用意ができていると思う者があるなら、これは間抜けというものであり、またなんらの知識（επιστάμενος,

knowledge）もなくしてしかも富あるがゆえに、己れが何かできる人間と人が思ってくれると考えたり、何かできると思われることがなくしてよい名声が得られると考える者があるなら、これも間抜け（ἠλίθιος, a simpleton）である。

＊次のような訳注となっている。

よく仕合わせている――ここには洒落があるのであって、eu prattein（幸福である、裕福である）を字義どおりに「よくやる」「見事に行なう」の意に利かせたわけである。日本語も「しあわせよし」「しあわせわろし」というから、よく似た言い方である。

なお εὖ πράττω は「うまくいく」「羽振りがよい」「幸運である」という意味をもち、κακῶς πράττω は「うまく行かない」「不遇である」という意味をもつ。

(12) クセノポーン『言行録』の 4.2. そのものは分量が多いので、ここでは場面を想い起すために、その 4.2.1-2 を下記に引いておく（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。

最善の教育を受けていると信じ、大いに智慧を自負している人々には、彼はこれをどう扱ったか、次にのべて見よう。

秀才エウテュデーモスが有名な詩人や学者の書物をたくさん収集して、そのために早くも自分が同年配の者にぬきんでた智慧者と考え、演説ならびに実行の技能においてあらゆる人間に立ちまさるという、大変な信念を抱いているのを、彼が知った。ところで、少年はまだ年が若くて広場（アゴラー）には入れないので、何かして見ようと思うときには、広場（アゴラー）の近くのある一軒の鞍屋の店に座り込んでいるということをまず知ったので、ソークラテースは二三人の弟子を連れて自分からこの店へ出かけて行った。

最初のときは、一緒に行った一人が「テミストクレースがあれほどすべての市民にすぐれて偉かったのは、誰か学者の教えを受けてああなったのか、それとも生まれつき（φύσει, by natural ability）ああだったのだろうか、国家にひとたび大人物の必要が起ったとき、すべての人の期待は自ずとテミストクレースに注がれたのであるが」とたずねたのに対して、ソークラテースはエウテュデーモスを釣り出そうと思って、「つまらない技術でもすぐれた腕を持とうとすれば、立派な師匠につかないではできないのに、国家の頭に立つというような、あらゆる仕事のうちの最大のものが、ひとりでに（ἀπὸ ταὐτομάτου, of its own accord）人間にできるなどと考えるのは愚かなことだ」と言った。

(13)『言行録』4.2.4 は、ソークラテースが挑発的に仮想するエウテュデーモスの演説の「前置き」の箇所であり、下記のとおりである（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。

「『アテーナイ人諸君、私は誰からも何も学ば（ἔμαθον, learned）ず、また言論ならびに実行にすぐれているという人のことを聞いて、これに会って見ようとしたこともない、かつ知識のある人間の誰をも自分の先生としようと考えたこともない、否、すべてその反対である。なんとなれば、私は常に人から何か習うことを避けて来た（διατετέλεκα γὰρ φεύγων οὐ μόνον τὸ μανθάνειν τι παρά τινος, I have constantly avoided learing anything from anyone）のみでなく、習ったと思われるこ

とさえ避けて来たからである。とは言え、私は私の脳裏にひとりでに湧いて来ることを諸君におすすめするであろう。』

(14)『言行録』4.2.11 は下記のとおりである（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。なおこの箇所は、本継続研究 (16) ≪原文注記≫の＜注記と考察＞ (13)（論文ページ 53 の箇所）で引いている。

そこでソークラテースが言った、

「だが、まさか、エウテュデーモス、君は政治家とか経済家とか立派な支配人とかになって、他人ならびに自らの生活を幸福ならしめる、あの美徳（τῆς ἀρετῆς, the kind of excellence) を求めているのではあるまい。」

するとエウテュデーモスが言った、

「いかにもそれなんです、ソークラテース、その美徳を求めているのです。」

「それはまことに」とソークラテースは言った、「最高にして最大の技術（τέχνης, arts）に進もうとしているものだ。なんとなれば、この技術は君主の道であり、帝王道（βασιλική, ‘regal’）と呼ばれているからだ。だが一体正しい人間とならないでこうした道を行ない得る者となれるかどうか、君は考えたことがあるか。」

「ええ、あります。それどころか正義（δίκαιον, justice）がなくては良い市民にもなることができません。」

「ではどうだ。君はそれではそれができているかね。」

「ええ、ソークラテース、私は自分が誰にも劣らず正しい（δικαιοσύνης, just）人間であるのを示し得るつもりです。」

2.1.17 はアリスティッポスの発言部分であり、以下のとおりである（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。

「あらゆる懲罰を加えますよ、困っておとなしく奴隷仕事をするようになるまで。ですが、ソークラテース、帝王道（τὴν βασιλικὴν τέχνην, the art of kingship）に対して教育される人間は、この道をあなたは幸福（εὐδαιμονίαν, happiness）の道と考えておられるように思いますけれど、実に飢えたり渇えたり凍えたり眠らずにいたり、そのほか、あらゆる難儀を喜んでしなくてはならんものとしたら、むりやりに難儀をなめさせられる人人と、どこがちがうのですか。私には、おなじ皮膚が笞杖に好んで打たれようが嫌がって打たれようが、あるいは一と口に言って、同じ肉体をこうした数々の難儀に、喜んで責めさせようが嫌がって責めさせようが、どこにちがいがあるのかわかりません、ただ一つ、苦しみを耐えたがる奴が阿房だということを別にしては。」

3.9.10 は下記のとおりである（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。なおこの箇所は本継続研究 (16) ≪原文注記≫の＜注記と考察＞ (25)（論文ページ 57）で引いている。

王者（βασιλεῖς, kings）及び治者（ἄρχοντας, rulers）とは権杖を手に持つ者のことではなく、また群衆によって選ばれた者でもなく、籤にあたった者でもなく、詐欺手段を用いた者でもなく、治むる（ἄρχοντος, rule）道を心得た者のことであると言った。

(15)『形而上学』A6.987b1. は下記のとおりである（『アリストテレス全集 12　形而上学』岩波書店、1968 年、に拠る）。

ところでソクラテス * は、倫理的方面の事柄（τὰ ἠθικά, moral questions）についてはこれを事としたが、自然の全体についてはなんのかえりみるところもなく、そしてこの方面の事柄においてそこに普遍的なものを問い求め、また定義すること（ὁρισμῶν, definition）に初めて思いをめぐらした人であるが、このことをプラトンはソクラテスから承け継いで、だがしかし、･･･（以下略）

* 次のような訳注がある。

ソクラテス（前 470-399 年）は、プラトンの諸対話篇が伝えているように、その対話問答で諸々の徳に関しその「そもそもなにであるか」を問いただした。（この問答活動を知恵の探求 φιλοσοφία とも呼んだ。）そして、プラトンの「イデア」または「エイドス」というのも、あるいはアリストテレスの「実体」とか「本質」とか「形相」とかいうのも、結局、このソクラテスの対話問答に由来するもの、その「なにであるか？」と問い求められた当のものを指す一般名詞（普遍概念）にほかならない。

(16)『ニーコマス倫理学』の指示されている 1.1.1094a27 の直前から 1094b10 までは下記のとおりである（高田三郎訳、『ニコマコス倫理学』、岩波文庫（上）、1971 年、に拠る）。

このことは、だが、最も有力な最も棟梁的 * な位置にあるところのものに属すると考えられるであろう。ところで、こうした性質をもつと見られるものに政治（ヘー・ポリティケー）（ἡ πολιτικὴ, the science of Politics) なるものがある。というのは、国（ポリス）においていかなる学問（τῶν ἐπιστημῶν, knowledge）が行わるべきか、各人はいかなる学問をいかなる程度まで学ぶべきであるかを規律するのは「政治」であり、最も尊敬される能力、たとえば統帥・家政・弁論などもやはりその下に従属しているのをわれわれは見るのである。それは他のもろもろの学問を役立てるものであり、さらにまた何をなし何をなさざるべきかを立法するものなるがゆえに、それの目的は他のもろもろの学問の目的を包括しており、したがって、「人間というものの善（ト・アントロービノン・アガトン）（τἀνθρώπινον ἀγαθόν, the Good of man）こそが政治の究極目的でなくてはならぬ。まことに、善は個人（ἑνὶ, the individual）にとっても国（πόλει, the state）にとっても同じものであるにしても、国（ポリス）の善に到達しこれを保全することのほうがまさしくより大きく、より究極的であると見られる。けだし、もとより善は単なる個人にとっても好ましきものであるが、もろもろの種族（エトノス）（ἔθνει, a nation）やもろもろの国（ポリス）（πόλεσιν, a state）にとってはそれ以上にうるわしく神的なものなのだからである。われわれの研究はこうしたことがらを希求する（ἐφίεται, aim）ものであり、この意味でそれは一種の政治学（ポリティケー）（πολιτική, the study of Politics）的な研究だといえよう。

*「棟梁的」については、少し手前の訳文注記として、次のように説明されている。

「棟梁的」と訳された「アルキテクトニコン」とは、本来、建築における「アルキテクトーン」的ということを意味する。「アルキテクトーン」とは、「下働きの大工」（ケイロテクネース））に対して、「大工の棟梁」であり、全体に対する

構想を有しつつ家屋の築造を主宰するひとの意であった。architect という語はこれに基づく。

また指示されている 10.10 は、岩波書店『アリストテレス全集 13 ニコマコス倫理学』（1973）の目次構成における「第十巻」の「X 幸福について」（第 6 章～第 9 章）のことと判断される（なおドイツ語版では「K10」と指示されているが、「K」はローマ数字の「X」のことか？）。

(17)『パイデイア』I. 106 の注 27. では、アイスキュロスの『テーバイを攻める七人の将軍』の 610 が指示されている。そこはエテオクレースの言葉のなかの部分であるが、その言葉の一部分は下記のとおりである（610 をゴチで記す）。

・・・

そのようにかの予言者、すなわちオイクレースの子アムピアラーオスは、
賢明で（σώφρων, virtuous）**正しく**（δίκαιος, upright）、**勇敢で**（ἀγαθὸς, courageous）**敬虔な**（εὐσεβὴς, pious）**男であり**、
また偉大な予言者でもありながら、不敬な連中と交わり
その心に背いて不遜な口を利く者どもと共に、
引き返すには遠すぎる旅路につき、
ゼウスの意志によってもろともに破滅に引きずり込まれることだろう。

(18)『形而上学』A6.987b1. は上記 (15) のとおりである。M3.1078b18 は、その前後を略し、その箇所のみを確認すると下記のとおりである（『アリストテレス全集 12』岩波書店、に拠る）。

しかし、ソクラテスが倫理上の諸徳（ἠθικὰς ἀρετὰς, the moral virtues）について専念し、そしてこれら諸徳について、初めて普遍的な定義（ὁρίζεσθαι καθόλου, a general definition）を求めることにつとめたときは、（以下略）

同様に、27 は下記のとおりである。

だから、二つのことが、正当にソクラテスに帰せられよう、すなわち、帰納的な論法と普遍的な定義（ὁρίζεσθαι καθόλου, general definition）をすることとが。

(19)『言行録』4.6.1. は下記のとおりである（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。

彼はまた弟子たちを討論に秀でた人間にしたが、私はこれについても述べて見よう。ソークラテースは、それぞれの事物についてはこれがなんであるかを知っている人は、また他人にこれを説明し得るものであると考えていた。しかし、知らぬ人間は自分でもあやまち、また他人をもあやまたしめるのに、なんの不思議もないと言っていた。それゆえ彼は弟子たちとともにそれぞれの問題をとらえて、これがなんであるかを検討してやむときがなかったのである。彼の定義したところ（διωρίζετο, his definitions）を残らずあげるのは容易な業でない。私は彼の検討法の特質を明らかにするに必要と思うものだけを、あげるにとどめようと思う。

διορίζω には「区別する」「規定する、定義する」という意味がある。

(20) 指示されている 25,26 頁は、本継続研究 (7)II. A.3.「現代に再現するソークラテース像をめぐる研究の対立――H. マイアーとスコットランド学派（j. バーネット、A.E. テーラー）」のパートの後段（論文ページ 51 ～ 52）に該当する。

(21) 指示されている『言行録』4.6 は、その全体が諸「美徳」に関するものであり、そ

の中には δίκαια (just) に関する部分もある。ここでは、その「正しいこと」をめぐる対話の部分を引いておく（佐々木訳『ソークラテースの思い出』に拠る）。

「正しい（δίκαια, just）こととは、どういうことをさすのか、知っているか。」

「法（οἱ νόμοι, the laws）が命ずるところのものです。」

「法の命ずるところを行なう人々は、正しいことおよびなすべきことを、なす者だね。」

「それにちがいありません。」

「正しいことをなす人々が、正しい人々ではないか。」

「そうだと思います。」

「では、法が何を命ずるかを知らない者が、法にしたがうと思うか。」

「思いません。」

「しかし、何をなすべきかを知っていて、しかもこれを行なってはならぬと考える者があると、思うか。」

「思いません。」

「ぜひこうすべきだと考えることをしないで、ほかのことをする人間を知っているか。」

「知っていません。」

「すると人間に関する法を心得ている人々が、これが正しいことを行なう人々だね。」

「まったくです。」

「そして正しいことを行なう人々が、まさに正しい人々ではないか。」

「そうでなくてはなりません。」

「さあ、それでは、人間に関する法を心得て居る人々が、正しい人々であると定義をくだして、われわれの定義は正しいであろうか。（Ὀρθῶς ἄν ποτε ἄρα ὁριζοίμεθα ὁριζόμενοι δικαίους εἶναι τοὺς εἰδότας τὰ περὶ ἀνθρώπους νόμιμα, “At last then, we may rightly define just people as those who know best what is just concerning people?”）」

「正しいと思います。」

(22) 指示されている『パイデイア』III. 56 は、本継続研究 (12)II. 2「イソクラテースの弁論術とその教養理念（その 2）」の 6.「イソクラテースのソークラテース学徒たち（プラトーン）に対する批判――ギリシア的パイデイアーの新展開の局面にあって」の冒頭部分である（論文ページ 208 ～ 209）。その中で、論述に直接的に該当する部分は下記のとおりである。

イソクラテースは名を挙げることはしないが、しかし彼の論争のすべてのことばは、まっすぐにソークラテース学徒たちに向けられているのであって、その彼らを彼は、此処や他の場所で、軽蔑的に ‘disputers 争論家たち’（Streitredener）と呼んでいる。《35》『プロータゴラース』と『ゴルギアース』においてプラトーンは、弁証法（dialectic, die Dialektik）を、弁論家（rhetoricians）たちの長たらしい演説にはるかに勝る技術として描き出していた。彼の敵対者〔= イソクラテース〕は、弁証法を手早く片づける：彼〔= 彼の敵対者（= イソクラテース）〕それ

を論争術（eristic, der Eristik）――すなわち、議論のための議論――と結びつけて考える（zusammenwirft 一緒くたにする）。真の哲学（true philosophy, die echte Philosophie）はいつも自身を論争術からは免れている（unterscheiden 区別する）ようにと努めるのであるが《36》、それでもプラトーンが描くソークラテースの方法は（時折り：zuweilen）いろいろなところがそれ〔= 論争術〕と共通しているように見えるのである；そして実際に、『プロータゴラース』や『ゴルギアース』のような初期の対話篇には、そうしたものがかなりある。《37》

上記引用文中の原文注記≪ 37 ≫も参照のこと。

(23)『プロータゴラース』355a-b は下記のとおりである（藤沢訳、岩波文庫、に拠る）。

〔ぼくは世人に対する語りかけをつづけていった。次のように――〕

「では、もう一度もとにもどって、諸君、かりに君たちがぼくにこうたずねたとしよう。『いったいぜんたい何のためにあなたは、そんなことについて、いろいろとたくさんのことをああだこうだとおっしゃるのですか？』

大目にみてくれたまえ、とぼくは答えるでしょう。なぜなら、まず第一に、君たちが快楽（τῶν ἡδονῶν, pleasures）に負けると呼んでいる事態が、そもそも何であるかを示すのは容易なことではないのだし、さらには、その証明のすべては、いま述べているこの点にかかっているのだからね。しかし、もし君たちが何らかのかたちで、善（τὸ ἀγαθον, the good）とは快楽のことではなく、何かほかのものであり、悪（τὸ κακὸν, the bad）とは苦痛（τὴν ἀνίαν, pain）のことではなく、何かほかのものであると主張することができるなら、いまでもまだ遅くはない、前の主張を撤回してもらってかまわないのだよ。それとも君たちは、諸君の人生を苦痛なしに、楽しく生きおおせることで満足するかね？もしそれで満足ならば、そして何かほかに、究極においてこれらの快と苦につながらないようなものを、善もしくは悪として主張することができないならば、この先をよく聞きたまえ。

いいかね、ぼくが諸君に言いたいのは、もし以上のことが事実だとすれば、君たちの次のような説はおかしなことになるということなのだ。つまりそれは、君たちが、『ひとはしばしば、悪を悪と知りながら、しかもなお、それをしないでいることができるのに、快楽にいざなわれ快楽に目がくらんで、それらの悪いことを行なう場合がある』と言うときのことだ。さらに他方、君たちは、『人間は善い事柄を知っていながら、その瞬間の快楽に打ち負かされて、それを行なおうとしないものだ』とも言うようだね。

こういった説がどんなにおかしなものかということは、次のようにすればはっきりとわかるだろう。すなわち、『快い（ἡδεῖ, pleasant）』『苦しい（ἀνιαρῷ, painful）』『善い（ἀγαθῷ, good）』『悪い（κακῷ, bad）』というたくさんの名称を同時に使うことをやめて、これらが結局二つのものに帰着することが明らかになったのだから、名称のほうもまた二つに限定して、最初は『善（ἀγαθῷ, good）』と『悪（κακῷ, evil）』という言葉だけを使い、つぎに今度は『快（ἡδεῖ, pleasant）』と『苦（ἀνιαρῷ, painful）』だけを使ってみればよいのだ。

(24)『プロータゴラース』の 352e はソークラテースの発言であるが、重要な内容なので b から e までを下記に引いておき、指摘されている部分はゴチ表記にしておく（藤

沢訳、岩波文庫、に拠る）。

「･･･（略）･･･

――さあどうか、プロタゴラス、あなたのお考えのこの点も、出して見せてください。すなわち、知識（ἐπιστήμην, knowledge）というものに対するあなたの立場は、いかがなのでしょうか。これについてもあなたは、世の多くの人々と同様の見解なのでしょうか、それとも別でしょうか？多くの人々は知識というものを、何か、強さも指導力も支配力もないようなもの（οὐκ ἰσχυρὸν οὐδ’ ἡγεμονικὸν οὐδ’ ἀρχικὸν εἶναι, no strong or guiding or governing thing）と見ています。知識について考える場合、彼らはけっしてそれをそういった性格のものとみなしていない。たとえ人間が知識をもっているとしても、いざ実際に人間を支配する（ἄρχειν, governed）ものは、しばしば知識ではなくて何かほかのもの――あるときには激情（θυμόν, passion）、ときには快楽（ἡδονήν, pleasure）、ときには苦痛（λύυπην, pain）、ときには恋の熱情（ἔρωτα, love）、またしばしば恐怖（φόβον, fear）などであると、こう考えているわけです。つまり何のことはない、彼らの考えている知識というものは、いわば奴隷（ἀνδραπόδου, a slave）のように、他のすべてのものによって引っぱりまわされるものなのですね。

はたしてあなたもまた、知識をこんなふうに見ていらっしゃるのでしょうか？それとも、知識は立派なものであって、人間を支配する力をもち、いやしくもひとが善いこと（τἀγαθὰ, good）と悪いこと（τὰ κακά, bad）とを知ったならば、何かほかのものに屈服して、知識の命ずる以外の行為をするようなことはけっしてなく、知恵（τὴν φρόνησιν, intelligence）こそは人間を助けるだけの確固とした力をもっていると、このようにお考えでしょうか」

「いかにもそれが」と彼は言った、「私の見解であるというだけでなく、ソクラテス、同時にまた、およそ人間にかかわりのあるすべてのもののなかで、知恵（σοφίαν, wisdom）と知識（ἐπιστήμην, knowledge）にまさるものはないと主張しないとしたら、余人はしらず、この私にとっては恥ずべきことだ」

「立派で正しいお言葉です」とぼくは言った、「ところでしかし、ご承知のとおり、世人の多くは私とあなたの言うことには承服しないで、こんなことを主張しています。つまり、最善の事柄（τὰ βέλτιστα, what is best）を知りながら、しかもそれを行なうことができるのに、そうしようとせずに、ほかのことをする人たちがたくさんいるというのです。そして私が、いったい何が原因でそんなことになるのかをたずねると、彼らがきまって言うことは、**そのようにする人たちは快楽や苦痛に負けるからだ（ὑπὸ ἡδονῆς φασιν ἡττωμένους ἢ λύπης ἢ, those who act so are acting under the influence of pleasure or pain）**とか、さっき私があげたような何かの力に屈服してそうするのだとかいうことです」

Ⅲ．現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート⑯
～継続研究 (22) における～

〔**Ⅳ．の趣旨について**：イェーガーは『パイデイア』第 1 巻の「序文」で、「今日でも、ギリシア的教養の徹底的な、根源的な理解抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。」という確信がこの著を生んだと語り、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようと努めるすべての人びとのためにも向けられている。」と述べている（本継続研究 (3)、II. 第 1 章＜訳文①＞）。イェーガーはこのように、現代という時代の課題の洞察を含んで古代研究に向かい、大著を完成させている。本継続研究は、このようにして成し遂げられた研究の瑞々しさに触発されてのものであり、『パイデイア』を読みながら考察意欲を引出されている諸点についても、この拙論そのものとして展開することはできないけれども、『パイデイア』研究の一環として記してみようと思う。〕

1) 古典期のギリシアには、パイデイアー（教養・教育）、つまり目に見ることの出来ない人間の内的な過程、を諸人に分かりやすく説明する寓話的な話が複数ある。そこでは、一つひとつの話は同一ではないのであるが（その違いが重要なのであるが）、「悪徳」と「美徳」の矛盾が凝視され、そこにおける魂の自主的な「選択」という試練のことが語られ、諸人を激励している。そのパイデイアー（教養・教育）は、古典期ギリシアにおける「幸福」観の思想的転回として探究されている

1．ソークラテースは、ギリシア人の通俗的な価値尺度には無かった、「内的な世界」「魂の卓越性（the excellence of the soul,ein seelischer Wert 魂の価値）」を提示していった

イェーガーは、プラトーンがソークラテースを「愛情に満ちた気配りと丹精込めた詳細さをもって、･･･ 彼の独特の流儀を描写している」ということを、単なる「詩的装飾」と受けとめてはならないと指摘し、「彼〔= ソークラテース〕が話をしている現実に存在する個人の（individual, des einzelnen Menschen 一人ひとりの）幸福へのソークラテースのあふれるほどの気遣い（the full Socrates' concern, sine Bemühung 彼の骨折り）を実感しなければ、われわれは彼が何を言っているのかを理解することはできない。」と述べている。以下は、本継続研究 (10)II. B.「4. 眼前の一人ひとりの幸福を気遣う行為としてのフィロソフィー（愛知）」（論文ページ 17 ～ 18）の一部である。

> ･･･ それでも、彼が話をしている現実に存在する個人の（individual, des einzelnen Menschen 一人ひとりの）幸福へのソークラテースのあふれるほどの気遣い（the full Socrates' concern, sine Bemühung 彼の骨折り）を実感しなければ、われわれは彼が何を言っているのかを理解することはできない。[(1)] 哲学者たちはそのような関係を抽象的、学術的な意味において本質的ではないと見なすかもしれないが、プラトーンは、ソークラテースにとってそれは本質的であったということを示している。･･･（中略）･･･ 確かに、ソークラテース自身が自分の 'activity 活動（Tun：行為）'（πρᾶγμα 行為･行動――（じつに：sehr）特徴的な言葉である）を 'philosophy（Philosophie）' そして 'philosophizing（Philosophieren）' と呼んでいる。プラトーン

の『弁明』において、彼は陪審員団に、自分が生きて息をする限り決してそれを止めないだろうと請け負っている。しかし（そのさい：dabei）われわれは、彼が、philosopy が後の世紀に長い発展過程を経て成ったもののことを――抽象的な思考方法、あるいは理論的言説から成る一連の学説というそれを創造した者から分離して考えられやすいもの、のことを――言っていると考えてはならない。ソークラテース文学（Socratic literature, Literatur der Sokratiker）の全てが、異口同音に、ソークラテースの学説は彼特有の持ち味から分離され得る、ということを否定している。

そのソークラテースが用いる二つの方法、「熱心な勧告（exhortation, Mahnung）（*protreptikos*）」と「厳しい試問（examination, Prüfung）（*elenchus*）」について、イェーガーは「『弁明』においても『プロータゴラース』においても、プラトーンはわれわれに、ソークラテースの語りの二つの基本的な装置――熱心な勧告（exhortation, die protreptische）と厳しい試問（examination, die elenktische）――は基本的にお互いに同種のものである、ということを教えている。実際に、それらは単に同一の精神過程の異なる段階にすぎない。このことは『弁明』によって証明され得るのであって、そこではソークラテースは自分の方法を次のように語っている」（本継続研究 (10) II. B.「5. フィロソフィー = 一つの精神過程としての「熱心な勧告」と「厳しい試問」、論文ページ 18 ～ 19）と説明していく。

そのソークラテースの『弁明』で語られる「フィロソフィーへの信頼の公言」は、大事な内容なので、イェーガーの叙述の該当箇所をそのまま【資料 -40】として再掲する（本継続研究 (10) II. B.「6.『弁明』における、有名な、フィロソフィーへの信頼の公言」、論文ページ 22）。

イェーガーは『弁明』を論じ、「蓄財の世話の代わりに、ソークラテースは自分の魂の世話（care for one’s soul, Sorge für die Seele 魂の世話）（ψυχῆς θεραπεία 魂の世話）を勧告する（advises, verlangt 要求する）。この考えは、彼の発言の初めに出てきて、末尾で繰り返される。」と指摘し、同時に、「われわれにとっては、少なくとも理論的には、そのこと〔= 魂が身体ないし外的財産よりもいっそう重要であるということ〕に特異なことは何もない；実際にそれは、むしろ平凡なことのように見える。しかし、そのことは、あの時代のギリシア人にとって、キリスト教伝統の 2000 年の後継者であるわれわれと同じように明白であっただろうか。」と注意深く考察していく。そうしてイェーガーは、ソークラテースの弟子たちの著述のなかに「ソークラテースによって魂の世話（the care of the soul, der Seelenpflege oder Seelsorge）が人間の最高の関心事（interest, Anliegen）として語られている、非常にたくさんの文章がある。」と指摘しつつ、「ソークラテースの見解では、魂は人間において神性をもつもの（the divine, das Göttliche）である」とし、「ソークラテースは魂の世話を、価値と真理の知識（the knowledge of values and truth, der Wert- und Wahrheitserkenntnis）、つまり *phronesis*（智慧）と *aletheia*（真理）、の世話であると、より厳密に定義する。魂は身体とも、外的な財産（goods, Gütern）と同じほど鋭く区別される。」と説明している。そうしてイェーガーは次のように論述する（本継続研究 (10)II. B「7. ソークラテースは、通俗的な価値理解を批判し、新たに魂の卓越性（アレテー）を最上位のものとして提起する」、論文ページ 24 ～ 25、

より）。

このこと（= 魂と身体との区別）は、（ただちに：unmittelbar）一種のソークラテース的価値の階梯（hierarchy of values, Wertordnung）というものを、さらにそれとともに、財産についての明瞭に段階づけられた新しい理論を、つまり、精神的な財産をもっとも上位に置き、身体的な財産をそれらの下に、そして、富や権力といった外的な財産を最下位に置く理論を、含意するのである。

この、ソークラテースによってあのように自信をもってはっきりと表明された価値尺度（this scale of values, Wertskala 価値の序列）と、麗しい古い酒宴の歌によく示されている、《67》通俗的なギリシア人のそれとの間には巨大な隔絶が存在する。

Health is best for mortal men,
Next best is being fair to see,
Blameless wealth is next again,
Last, youth and friends and revelry.

健康こそ死すべき人間にとっては最高の財産
二番目のものは容姿が美しいこと
疚しさのない富は三番目のもの
おしまいのものは、若さ（in Jugendglanz 若さの輝きのなかで）と友（in der Freunde Kreis 友人仲間で）と飲めや歌えの大騒ぎ

ソークラテースの思想は何か新しいものを――内的な世界を――追加したのであった。彼が話しているアレテーは、魂の卓越性（the excellence of the soul,ein seelischer Wert 魂の価値）である。

このように、ソークラテースが「現実に存在する個人の（individual, des einzelnen Menschen 一人ひとりの）幸福」のこととして全精神を傾けて説いているのは、「精神的な財産」を最上位に置くことであり、「身体的な財産」はそれらの下に、「富や権力といった外的な財産」は最下位に置くことである。ソークラテースは、このように、ギリシア人の通俗的な価値尺度には無かった、「内的な世界」「魂の卓越性（the excellence of the soul,ein seelischer Wert 魂の価値）」を提示していったのである。

２．プロディコスの「有名な岐路（the cross-roads, Scheidewege）の寓話」のこと

イェーガーは、プロディコス[(2)]の「有名な岐路（the cross-roads, Scheidewege）の寓話」について次のように叙述している：本継続研究 (19) II. B.「12. ソークラテースは道徳思想を外的な法律を遵守することから内的な法を至高とするものへと転換さていくが、そこに示される「自由」（freedom, die Freiheit）や「倫理的な自律性」（moral autonomy, sittliche Autonomie）、「autarkeia」（アウタルケイア「自足」「自立」）は、アリスティッポスの快楽主義やキュニコス（犬儒）学派の個人主義的極論とは異なり、ポリスの一員としての「政治的な生活 (political life, der Begriff des Politischen)」の下に探究されている」（論文ページ 3）。

･･･ 彼（アリスティッポス）の、当世風の微妙な（subtle, raffinierten）種類の個人主義（individualism, Individualismus）とは異なり、ソークラテースは、恒久的な市民という古典的な観念（ideal）を提示し、自分の政治的使命（と喜び：und

sein Glück）は、自分の弟子たちを自発的な訓練（askésis, „Askese”）をとおして支配者へと教育することだと考える。というのは、神々は人間に、困難と熱心な努力なしにはどんな本当の良いもの（real good, wahres Gut）をも許さないからである。彼は、ピンダロスのように、この種の教養（paideia, der Paideia）の神話的事例を示す:つまり、ソフィストであるプロディコスの、どのようにヘーラクレースが美徳の女神（Lady Areté, Frau Arete）によって教育された（was educated, der Erziehung）のかを伝える、有名な岐路（the cross-roads, Scheidewege）の寓話を。*

イェーガーは * の箇所に原文注記（《118》）を付し、次のように指摘している。

118. これは、プロディコスの、書物（σύγγραμμα）として出版された誇示的な演説（epideictic speech, epideiktische Rede）であった；それは、徳（areté）を達成しようと努力する具現としてヘーラクレース（Herales, der mythishe Heros 神話の半神）を扱っていた。彼の、婦人の徳による教育（education, der Erziehung）（‘Ηραχλεους παιδευσσις）の寓話的な物語は、英雄の偉大さへの前進において重要な段階であった；クセノポーン『言行録』2.1.21 以下。演説の題名と（文体上の：stilistische）形式については、クセノポーン『言行録』2.1.34 を参照のこと。その寓意物語の飾らない倫理的、理性的な調子にもかかわらず、それ〔= その寓意物語〕は、まだヘーラクレースの神話の真の本質に対する感受性をもっていた:Wilamowitz（ヴィラモーヴィッツ）, *Herakles* I,101 を参照のこと，彼はそれを、同時代の Herodorus によるヘーラクレースについての小説における彼〔= ヘーラクレース〕の教育の物語（the story about Heracles’ education, die Bildungsgeschichte des Helden 英雄の教育物語）と比較している 。

【資料 -43】クセノポーン『言行録』2.1.18 ～ 34（佐々木理訳『ソークラテースの思い出』、岩波文庫、1953 年、に拠る、71 ～ 77 頁）は、上述の「ソフィストであるプロディコスの、どのようにヘーラクレースが美徳の女神（Lady Areté, Frau Arete）によって教育された（was educated, der Erziehung）のかを伝える、有名な岐路（the cross-roads, Scheidewege）の寓話」（イェーガー）である。その寓話の冒頭では、次のような重要事が語られている。

ヘーラクレースが子供からまさに青年になろうとしていたとき、それは少年がいまや自己の主となって（αὐτοκράτορες γιγνόμενοι, becoming their own masters）人生に乗り出すのに、美徳の道によろう（τὴν δι’ ἀρετῆς ὁδὸν, by the path of virtue）とするか、それとも悪徳の道によろう（τὴν διὰ κακίας, by the path of vice）とするかを、現わしはじめるときであるが、彼は静かな場所へ出かけて行き、二つの道のどちらを歩もうかと当惑に暮れながら座っていたそうである。

つまりヘーラクレースが「子ども」から「青年」になろうとするとき、いい直せば、「少年がいまや自己の主となって人生に乗り出す」とき、「美徳の道」によるか、「悪徳の道」によるかの道の選択に迷う場面が語られている。そこに、「二人の身の丈の高い婦人」が現われて、それぞれにヘーラクレースを誘うのである。

一人の婦人は、「私はお前を最もたのしい最もらくな道に案内し、そしてあらゆる愉楽を一つとして余さず味わい、一切の苦労を嘗めずにすまさせてあげよう。」と誘う。そして自らのことを、『私の友人達は私を「幸福（Εὐδαιμονίαν, Happiness）」と呼ぶ、しかし私を嫌う人々は口悪く「悪徳（Κακίαν, Vice）」と名づける。』と話す。

もう一人の婦人「美徳（’Αρετὴ, Virtue）」が、「私は楽しみの序曲を語ってお前を欺くようなことをせず、むしろ神々がこの現実を配置せられているとおりに、真実をありのままに語ろう。なんとなれば、世の中の善にして（ἀγαθῶν, good）美なる（καλῶν, fair）物のいずれの一つも、神々はこれを人間に労せず努めずしてお与えにはならぬからである。」と語り聞かせていく。

それに対して「悪徳」は、『ヘーラクレース、この女の語る喜びへの道が、いかに険しくまた遠いかがわかるであろう。しかし私は幸福への楽な近い道へ、お前を案内しようとしている。』と誘う。

３. プラトーン『国家』におけるアデイマントスの、「節制や正義はたしかに美しい、しかしそれは困難で骨の折れるものだ、これに対して放埒や不正は快いものであり、たやすく自分のもとなる」「神々でさえも、善き人々に不運と不幸な生活を、悪しき人々にその反対の運命を与えることがしばしばある」という本音の問いかけ【資料 -41】、および『国家』の末尾における「正義はそれ自体として魂それ自体にとって最善のものであること」「魂は必ず正しいことを心がけなければならぬ」ということの寓話的な説明【資料 -42】について

『国家』において、アデイマントスは、「正義」をめぐる人びとの‘本音’のことを語り、容易にはソークラテースの説明に納得せず、たとえば次のように問いかけを続ける（364A~D）。

> これらに加えてさらに、ソクラテス、あなたに考えていただきたいのは、〈正義（δικαιοσύνης, justice）〉と〈不正（ἀδικίας, injustice）〉について個人的にも口にされ、詩人たちも公表しているような別の種類の言説のことです。
>
> すなわち、すべての人々が異口同音にくり返し語るのは、節制（σωφροσύνη, soberness）や正義（δικαιοσύνη, righteousness）はたしかに美しい、しかしそれは困難で骨の折れるものだ、これに対して放埒（ἀκολασία, licentiousness）や不正（ἀδικία, injustice）は快いものであり、たやすく自分のものとなる、それが醜いとされるのは世間の思わくと法律・習慣のうえのことにすぎないのだ、ということです。彼らはまた、不正な事柄のほうが多くの場合正しい事柄よりも得になると言い、邪まな人間であっても金その他の力をもっていれば、そういう人間のことを、公の場でも個人的な立場でも、何はばかるところなく、祝福し尊敬しようとします。他方、正しくても無力で貧乏な人間に対しては、前者とくらべてより善人であることは認めながらも、これを見下し、軽蔑しようとするものです。

アデイマントスは、こういった趣旨の言説の「証人」として（「悪徳が容易なものであることを裏づけようとして」）、次の詩を引用する。

> 悪徳（κακότητα, evil-doing）はやすやすと山ほども手にはいる
> そこへ行く道はなめらかで　その住居はごく近くにある
> されど徳（ἀρετῆς, virtue）の前には　神々は汗を置きたもうた
> そこに至る道は遠く険しく急である

さて、『国家』の末尾に至り、ソークラテース（= プラトーン）は「正義」について、グラウコンに対し次のように語っていく（612B）。

> 「さて」とぼくはつづけた、「これでわれわれは、さまざまの問題を議論のなかで片づけたわけだが、とくに、君たちが言っていた * ようなヘシオドスやホメ

ロスのやり方と違って、われわれは正義について、その報酬（τοὺς μισθοὺς, the rewards）や評判（τὰς δόξας, reputes）を讃えるということはしなかった。われわれが発見したのは、正義はそれ自体として魂それ自体にとって最善のものであるということ、そしてギュゲスの指輪をもっていようといまいと、さらにはそのような指輪に加えてハデスの兜をもっていようといまいと、魂は必ず正しいことを心がけなければならぬ、ということだったのだね？」[(3)]

あるいはソークラテース（= プラトーン）は、次のようにも語っていく (613A)。

「したがって正しい人間については、たとえその人が貧乏のなかにあろうと、病のなかにあろうと、その他不幸と思われている何らかの状態のなかにあろうと、その人にとってこれらのことは、彼が生きているあいだにせよ死んでからのちにせよ、最後には何か善いことに終わるだろうと考えなければならぬ。なぜなら、すすんで正しい人になろうと熱心に心がける人、徳を行なうことによって、人間に可能なかぎり神に似ようと心がける人が、いやしくも神からなおざりにされるようなことは、けっしてないのだから」

続いてソークラテース（= プラトーン）は、「正しい人と不正な人のそれぞれを死後において待ちうけているもの」を、「戦争で最期を遂げた」エルが生きかえり語ったその物語りとして描きながら、寓話風に話していく。その一部が【資料 -42】である。そこでソークラテース（= プラトーン）は、「魂の本性のこと（τῆς ψυχῆς φύσιν, the nature of his soul）」に目をむけながら、「より悪い生涯」ではなく「より善い生涯」を「選択（συλλογισάμενον αἱρεῖσθαι, a reasoned choice）」していくことこそ、「生きている者にとっても死んでからのちにも、最もすぐれた選択にほかならない」と述べ、次のように語っていく。

かくて人は、金剛のごとく堅固にこの考えをいだいてハデスの国（冥界）へ赴かなければならぬ。あの世においてもまた、富およびそれと同類の害悪に目をくらまされることなく、独裁僭主の生活やその他同様の境遇に落ちこんで多くの癒しがたい悪事をはたらいたり、さらには自分自身がもっと大きな害悪を身に受けたりすることのないために、しかり、できるかぎり現在のこの生涯においても、またこれから来るべきどの生涯においても、そうした外的条件に関しては、つねに中庸（μεσον, the mean）の生活を選び、どちらかの方向に度を越えた生活を避けることを知るために ‥‥‥。

なぜならば、人間はそのようにしてこそ、最も幸福になれるのだから（τῷ ἔπειτα ὅυτω γὰρ εὐδαιμονέστατος γίγνεται ἄνθρωπος, for this is the greatest happiness for man）。

* には訳注（「II. 363A（上巻）」）が付されている。その箇所はアデイマントスの問いかけの発言であり、下記のとおりである（藤沢訳、岩波文庫、上巻、に拠る）。

しかし、評判について彼らが語るところはこれにとどまらず、さらに大仰な事柄に及んで行きます。というのは、彼らは、神々からよく評判されることまでも勘定に入れて、敬虔な人々に神々が与えると言われている数々の善いものを、ふんだんに挙げることができるからです。これは、かのけだかいヘシオドスやホメロスの主張するところでもありまして、ヘシオドスは、神々は正しい人々のため

に、

　樫の樹々の梢は実をたわわにむすび　幹には蜂蜜が巣をいとなみ

　毛深い羊らは　房々とした綿毛を重くつける

ようにはからうのだと言い、その他これに類する多くの善いことを与えたもうのだと語っています。他方のホメロスもまた、これに近いことを言っています――

　神を畏れつつ正義を守る　聖王の ･･････

　その王のために黒い大地は　小麦と大麦をみのらせ

　樹々は　枝もたわわに実をむすび

　羊は仔を生まぬこととてなく　海は魚を恵む

4.「ケベースの絵馬」（【資料 -39】）の概要について

本継続研究 (21) の III. に神谷美恵子訳「ケベースの絵馬」より抜粋（【資料 -39】）を掲載した。ここでは改めて、その作品〖1 ～ 41〗のうちの〖1 ～ 23〗のアウトラインを正確に確認しておきたい。(4)

この「ケベースの絵馬」は、(「私ども〔= 外国から来た旅人〕がクロノスの神殿を散歩していた時」に目にした」)「絵馬」の意味を「老人」が説明してくれるという設定になっている。その語りの最初の方に次のような説明がある。

「まずあなた方の知らなければならないのは、ここが『人生（Βίος)』と呼ばれるところだということです。門の前に押しよせている大ぜいの人の群は人生の中に入ろうとしている人々です。･･･」

この人々は、一人残らず、『あざむき（’Απάτη)』と呼ばれる女から『誤謬（πλάνος)』と『無知（ἄγνοια)』を飲まされることになる。続いて人々は、『意見（Δοξαι)』『欲望（’Επιθυυίαι)』『快楽（‘Ηδοναί)』という女たちに抱き着かれ次のように誘惑される。

「女たちはみんな最上のものへ、幸せな有利な人生へ導いてあげると約束するんです。そこである者は『あざむき』のところで飲んだ『無知』と『誤謬』のために人生における本当の道を見いだすことができず、あてどもなくふらつきまわる。先に入った連中があちこちへひきまわされているのが見えるでしょう、ちょうどそんな具合なのです。」

『運命（Τύκη)』の女については、次のように問いと説明が進んでいく。

「あの女からもらうとそんなに喜び、取られるとそんなに嘆くとは、いったいあの女はあの人たちに何をやったのでしょう。」

「それは多くの人間の眼には善いものに見えるものですよ。」

「何ですか、それは。」

「いうまでもなく、富（πλοῦτος）とか名誉（δόξα）とか、身分（εὐγένεια）とか子供（τέκνα)、統治権（τυραννίδες)、王国（βασιλεῖαι)、その他これに類したもの全部です。」

さらに『運命』の女から何かもらった人間にとびかかる『無節制（’Ακρασία)』『放縦（’Ασωτία)』『貪欲（’Απληστία)』『へつらい（Κολακεία)』の女たちのことが、次のように語られる。

「そういう人間に女たちはとびかかり、抱きつき、お世辞を言い、自分たちといっしょに留まるようにすすめ、そうすれば楽しい、苦労のない生活、少しも艱難の

ない生活を送ることができると言ってきかせる。もし誰かが女たちに説き伏せられて『奢侈（‘Ηδυπάθειαν)』に入ると、その生活はある時までは愉快に思われる、つまりそれがその人間をいい気持にするかぎりはね。ところがそのうちにそうではなくなる。というのは、我に返ると、ご馳走を食べたのは自分ではなくて、じつは自分の方がその生活の食いものにされたのだと気がつくのです。こういうわけで、運命の女神からもらったものをすべて使い尽してしまった暁には、あの女たちの奴隷（δουλεύειν）として仕えなくてはならない破目に陥り、どんなことをも忍び、恥ずべきこと（ἀσχημονεῖν）を行ない、女たちのためにあらゆる悪事をしなくてはならなくなる。たとえば盗むとか、神殿のものをかっぱらうとか、偽誓や裏切りや掠奪など、これに類したありとあらゆる行為です。そしてもう何もすることがなくなると、『懲罰（Τιμωρία)』の手に引き渡されてしまう。」

「ケベースの絵馬」では、さらに『悔い改め（Μετάνοια)』に出会ってからの、『真の教養（τὴν ἀληθινὴν Παιδείαν)』と『偽の教養（Ψευδοπαιδεία)』への二つに道のことが語られていく。その『真の教養』への道については、次のように説明が進んでいく。

「『真の教養』へ行く道はどれでしょう。」

「あそこの上の方の、誰も住まないさびれた様子のところが見えますか。」

「見えます。」

「それからまた、小さな戸があって、その戸の前にあまり踏まれもしない道のあるのが見えますか。道も通わぬ荒野で、ごつごつした岩だらけのところのように見えるので、この道を行く人はきわめて少ないんですよ。」

「なるほど。」

「それからまた、高そうな丘が見えますかね。その丘にはえらく細い登り道がついており、あちこちに深い崖がある。」

「見えます。」

「あれが『真の教養』へ行く道なんですよ。」

「見るからにたいへんそうですね。」

「また丘の上に大きい高い岩があって、そのぐるりがずっと険しいのが見えますか。」

「ええ、見えます」と私は申しました。

その岩の上には姉妹の『自制（’Εγκράτεια)』と『忍耐（Καρτερία)』が居て、ここまで来た人たちを、「もうしばらくの辛抱でよい道に連れて行ってあげる」と激励し、間もなく『力（ἰσχὺν)』と『勇気（θάρδος)』を与えてやり『真の教養』への途を見せてやる。老人は、「その途は美しく、平坦で、歩きやすく、いかなる悪にも汚されぬ潔いもの」だという。

老人はさらに、絵馬にある「牧場」の、その中の住まいを示し、「あれは幸福な人々の住居なのです。あそこにあらゆる『徳（’Αρεταὶ)』と『幸福（Εὐδαιμονία)』とが住んでいます。」と説明する。

老人は続けて、『教養（Παιδεία)』という女、『真理（’Αλήθεια)』と『説得（Πειθώ)』という二人の娘を示し、『教養』は『勇気（θάρδος)』と『大胆（ἀφοβία))』という賜を与えると言い、その賜は次のようなものだと説明する。

「つまり、人生においてもうけっして恐ろしい目に会うことはない、という確信です。」

『教養』のところに着くと人々は潔められ、『知識（’Επιστήμην）』や『徳（’Αρετάς）』たちのところに連れて行かれるという。その『徳』たちの説明は次のようになっている。

「最初のが『知識』といい、他の女たちはその姉妹で、『雄々しさ（’Ανδρεία）』、『正義（Δικαιοσύνη）』、『誠実（Καλοκἀγαθία）』『思慮（Σωφροσύνη）』『秩序（Εὐταξία）』『自由（’Ελευθερία）』『克己（’Εγκράτεια）』『優しさ（Πραότης）』という。」

「おお、なんと大きな希望が私どもには与えられていることでしょう」と私は申しました。

「ただし、あなた方がよく理解して、聞いたことをそのまま身につけ、習慣にして（ἕξιν）しまわなければ駄目ですよ。」

老人は、それらの『徳』たちは、迎えた人びとを自分たちの「母親」である『幸福（Εὐδαιμονία）』のところに連れていく、と説明する。そこでは、人びとは「最大の戦いと最大の野獣ども（θηρία）に勝った」ことに対する「冠」がかぶらされる、という。「私」と老人との対話は次のように続いていく。

「どんな野獣のことをおっしゃるのですか。うかがいたくてなりません。」

「まず『無知（’Ἄγνοιαν）』と『誤謬（Πλάνον）』。こういうものが野獣のように思われませんか。」(5)

「そう、しかも性の悪い奴ですね」と私は申しました。

「それから『苦悩（Λύπην）』、『悲嘆（’Οδυρμὸν）』、『吝嗇（Φιλαργυρίαν）』、『無節制（’Ακρασίαν）』、およびその他いっさいの『悪（Κακίαν）』。すべてこういうものを今度はその人間の方が支配する（κρατεῖ）のです。以前のようにこれらのものに支配される（κρατειταῖ）のではなくてね。」(6)

「なんとすばらしい事業でしょう。そして、なんとすばらしい勝利でしょう。ですが、もう一つ教えてくださいませんか。その人がかぶせられるというその冠の力とやらは何のことなのですか。」

「それは幸福（Εὐδαιμονικὴ）の冠ですよ。この力の冠をかぶせられた者は幸福になり祝福された者となるんです。そしてその幸福の希望を（τὰς ἐλπίδας τῆς εὐδαιμονίας）自分以外のものに（ἐν ἑτέροις）置かないで、自分自身の内に（ἐν αὑτῶ）置くのです。」

2）【資料 40 ～ 43】の掲載

【資料 -40】

イェーガーによる『弁明』中の‘フィロソフィーの信頼の公言’の紹介箇所：本継続研究 (10)

Ⅱ．B.「6.『弁明』における、有名な、フィロソフィーへの信頼の公言」、（論文ページ 22）

‘私は、知を愛し求めることを（philosophizing, zu philosophieren）、あるいはあなた方に熱心に勧めることを（urging, zu ermahnen 勧告する）、また私が会うだれに対しても、いつもの私の仕方で以下のように述べながら、私の主張の正しいことを明瞭に示すことを、決してやめないであろう：“わたしの親愛なる方よ、あなたはアテーナイ人であって、もっとも偉大にしてその知恵（wisdom, Weisheit）

と力(power, Macht)において非常に名高い都市の、その市民である；そのあなたが、善と真理の知識（the knowledge of good and truth, die Erkenntnis dessen, was gut und wahr ist）と自らの魂（your soul, deine Seele）を善くするために気遣いし[(7)]ないで、自分の富とその蓄財、あるいは自分の世評、あるいは自分の名誉のことに頭を煩わしていることに恥ずかしくはないのか？”そしてもしだれかが私に反駁し、自分は自分の魂のことに頭をつかっていると言えば、私はすぐに彼を放免もせず自分も立ち去らないで彼を問い（question, fragen）、彼を吟味し（examine, prüfen）、彼を論駁する（refute, widerlegen）だろう；そうして、もし私が、彼は徳（virtue, Arete）をもっていなくて、単にもっていると言っているだけだと考えたら、私は彼を、もっとも価値あるものを過小評価しているからと、また重要でないものを尊んでいるからと、非難するだろう。私はこのことを、若い者にも年とった者にも、異邦人にも市民にも、会う人すべてに――しかしとくに、あなたがたアテーナイ市民に――するだろう、なぜならあなた方は血筋が私に近いからだ。というのは、このことは、あなた方は理解すべきであるが、神の私への命令なのである；そして私は、この私の神への奉仕以上に善いこと（good, Gut）が（わたしたちの都市で：in unserer Stadt）あなた方に起きたことはかつてなかったと判断する(think, glaube 信じる)。というのは、わたくしのすることはただ、歩き回り、あなた方のなかの若い者や年とった者に、自分の魂を完成すること（the perfection of your souls, die Vollkommenheit eurer Seele）ほどに自分の身体や財産に注意を向けることのないように、説得する（persuade, überreden）ことだけなのである。’

【資料 -41】

プラトーン『国家』第２巻 364A~365A（藤沢令夫訳、岩波文庫・上、に拠る）

これらに加えてさらに、ソクラテス、あなたに考えていただきたいのは、〈正義（δικαιοσύνης, justice)〉と〈不正（ἀδικίας, injustice)〉について個人的にも口にされ、詩人たちも公表しているような別の種類の言説のことです。

すなわち、すべての人々が異口同音にくり返し語るのは、節制（σωφροσύνη, soberness）や正義（δικαιοσύνη, righteousness）はたしかに美しい、しかしそれは困難で骨の折れるものだ、これに対して放埒（ἀκολασία, licentiousness）や不正（ἀδικία, injustice）は快いものであり、たやすく自分のものとなる、それが醜いとされるのは世間の思わくと法律・習慣のうえのことにすぎないのだ、ということです。[(8)] 彼らはまた、不正な事柄のほうが多くの場合正しい事柄よりも得になると言い、邪まな人間であっても金その他の力をもっていれば、そういう人間のことを、公の場でも個人的な立場でも、何はばかるところなく、祝福し尊敬しようとします。他方、正しくても無力で貧乏な人間に対しては、前者とくらべてより善人であることは認めながらも、これを見下し、軽蔑しようとするものです。

しかし、すべてこうした言説のなかでも最も驚くべきは、神々と徳（ἀγαθοῖς, virtue)について語られている次のようなことでしょう。つまりそれによると、神々でさえも、善き人々に不運と不幸な生活（βίον κακὸν, an evil life）を、悪しき人々にその反対の運命を与えることがしばしばある、というのです。そして乞食坊主

や予言者といった連中は、金持ちたちの家の門を叩いては、自分には犠牲や呪文によって神々から授かる力があるのだと信じこませようとします、――もしあなたに何か罪があるならば、それをおかしたのがあなた自身であろうと、あなたの先祖であろうと、宴会を楽しんでいる間に自分はその罪を償ってあげることができる。また、もし誰か敵に危害を加えたいのであれば、その敵が不正な者であろうと正しい人間であろうと、わずかの金を出してくれさえすれば、呪いと魔力によってその敵をいためつけてあげよう。自分は神々にお願いして、自分の言うとおりに働いていただくように説得するのだからと、こう彼らは自称するわけなのです。

すべてこれらの言説に対する証人として引き合いに出されるのが、詩人たち（ποιητὰς, the poets）です。ある人々は、悪徳（κακίας, vice）が容易なものであることを裏づけようとして、引用します――

悪徳（κακότητα, evil-doing）はやすやすと山ほども手にはいる
そこへ行く道はなめらかで　その住居はごく近くにある
されど徳（ἀρετῆς, virtue）の前には　神々は汗を置きたもうた
そこに至る道は遠く険しく急である [*1]

またある人々は、神々が人間の言いなりになるということについて、ホメロスを証人として引き合いに出します。というのは、ホメロスもこう言ったからです――

神々御自身でさえ　願いによって御心を動かす
されば人間たちは供物を捧げ　やさしく祈り
御神酒や犠牲の焼香によって　宥しを乞うては
神々のお怒りをやわらげる――罪をおかして過ったときには [*2]

さらに彼らは、セレネやムゥサの女神たちの子と称するところの、ムゥサイオスとオルペウスの書物なるものをどっさりと持ち出し、それにもとづいて犠牲を捧げる式典をとり行います。彼らはそのようにして、個人（ἰδίωτας, ordinary men）のみならず国家（πόλεις, states）までも説得して、供犠（θυσιῶν, sacrifice）と楽しい遊戯（παιδιᾶς ἡδονῶν, pleasant sport）によって生前も死後も不正な罪を赦免され、浄められることができるのだと信じこませるのです。この供犠と楽しい遊戯のことを彼らは『秘儀（τελετὰς, functions）』と名づけ、それはわれわれをあの世での苦しい罰から解放してくれるが、この儀式をなおざりにする者には、数々の恐ろしいことが待っているのだ、とおどかすわけです。

*1 次の訳注がある。
ヘシオドス『仕事と日々』287-289 行、および 290 行を少し変えた引用。[(9)]

*2 次の訳注がある。
『イリアス』第 9 巻 497-501 行を少し変えた引用。

【資料 -42】

プラトーン『国家』第 10 巻 617C ～ 619B（藤沢令夫訳、岩波文庫・下、に拠る）

ほかに三人の女神が、等しい間隔をおいて輪になり、それぞれが王座に腰をお

ろしていた。これはアナンケの女神（τῆς ’Ανάγκης, Necessity）の娘、モイラ（運命の女神）（Μοίρας, the Fates）たちであって、白衣をまとい、頭には花冠をいただいている。その名はラケシス、クロト、アトロポス。セイレンたちの音楽に合わせて、ラケシスは過ぎ去ったことを（τὰ γεγονότα, the things that were）、クロトは現在のことを（τὰ ὄντα, the things that are）、アトロポスは未来のことを（τα μέλλοντα, the things that are to be）、歌にうたっていた。そしてクロトは間をおいては紡錘の外側の回る輪に右の手をかけて、その回転をたすけ、アトロポスも同じようにして、内側の輪に左手をかけてその回転をたすけている。ラケシスは、左右それぞれの手でそれぞれの輪に交互に触れていた。

さて、魂たちは、そこに到着すると、ただちにラケシスのところへ行くように命じられた。[*1] そこには神の意を伝える役の神官がひとりいて、まず彼らをきちんと整列させ、ついで、ラケシスの膝からさまざまの籤（κλήρους, lots）といろいろの生涯の見本（βίων παραδείγματα, patterns of lives）を受けとったうえで、高い壇に登って次のように言った。

『これは女神アナンケの姫御子、乙女神ラケシスのお言葉であるぞ。命はかなき魂たちよ、ここに、死すべき族がたどる、死に終わるべき、いまひとたびの周期がはじまる。

運命を導くダイモーン（神霊）が、汝らを籤で引き当てるのではない。汝ら自身が、みずからのダイモーンを選ぶべきである。[*2(10)]

第一番目の籤を引き当てた者をして、第一番目に一つの生涯を選ばしめよ（αἱρείσθω βίον, select a life）。その生涯に、以後彼は必然の力（ἀνάγκης, necessity）によって縛りつけられ、離れることができぬであろう。

徳（ἀρετὴ, virtue）は何ものにも支配されぬ（ἀδέσποτον, has no master）。それを尊ぶか、ないがしろにするかによって、人はそれぞれ徳をより多くあるいは少なく、自分のものとするであろう。

責めは選ぶ者にある。神はいかなる責もない』

神官はこのように言うと、すべての者に向かって籤を投げ与えた。それぞれの者は、自分のところに落ちた籤を取り上げたが、エルだけは除外された。彼にはそうすることを許さなかったのである。籤を取り上げた者は、それぞれ自分が第何番目を引き当てたかを知った。

そのあとでこんどは、神官はさまざまの生涯の見本を彼らの前の地上に置いたが、その数は、そこにいた者の数よりもはるかに多かった。

ありとあらゆる種類の生涯の見本がそこにはあった。あらゆる動物の生涯があったし、人間の生涯も、あらゆるものがそろっていたからである。たとえば、そのなかには独裁僭主の生涯もあったが、それも、一生つづくのもあれば、途中で滅びるのもあり、貧乏（πενίας, penuries）や追放に終わるもの、乞食となりはてるものもある、というふうであった。名高くなる男たちの生涯もあったが、そのあるものは姿かたちの点で、容貌の美しさの点で、あるいはまた強さの点で、競技の腕前の点で、名高くなる男たちの生涯であり、あるものは氏素性と先祖の功業において名高くなる男たちの生涯であった。また、こうした点にかけて評判

の悪い男たちの生涯もあり、同様にして女たちの生涯にも種々さまざまのものがあった。

ただしこれらのなかには、魂そのものの序列を決めるものはなかった。これは、魂はそれぞれが選んだ生涯に応じて、おのずから必然的にそれぞれ異なった性格を決定されるからである。しかし、いま挙げたようなそれ以外のさまざまの条件は、互いに混じり合い、富や貧乏と混じり合い、あるいは病気と、あるいは健康と混じり合っている。また、これら富と貧乏、健康と病気の中間の状態にあるものもある。

けだしこの瞬間にこそ、親愛なるグラウコンよ、人間にとってすべての危険がかかっているのだし、そしてまさにこのゆえにこそ、われわれひとりひとりは、ほかのことを学ぶのをさしおいて、ただこのことだけを自分でも探求し、人からも学ぶように心がけねばならないのだ――善い生と悪い生とを識別し（βίον και χρηστὸν καὶ πονηρὸν διαγιγνώσκοντα, distinguish the life that is good from that which is bad）、自分の力の及ぶ範囲でつねにどんな場合でも、より善いほうの生を選ぶだけの能力と知識を授けてくれる人を、もし見出して学ぶことができるならば。それによって、われわれのひとりひとりは、いまいろいろの生涯の見本として語られたすべての条件が、互いに結びつく場合にも、単独に別々のものとしても、善き生ということに対してどのような関係をもつかを考慮しながら、美しさが貧乏（πενία, poverty）あるいは富（πλούτω, wealth）といっしょになるとき、またどのような魂の持前（Ψυχῆς ἕξεως, habit of soul）[11] とともにあるとき、どのような善いこと悪いことをつくり出すかを知らなければならぬ。氏素性の良さ悪さ、私人としてあることと公的な地位にあること、身体の強さ弱さ、物分かりの良さ悪さ、そしてすべてそれに類する魂の先天的ないし後天的な諸特性（πάντὰ τα τοιαῦτα τῶν φύσει περὶ ψυχὴν ὄντων καὶ τῶν ἐπικτητων τί, all similar natural and acquired habits of the soul）が互いに結びつくとき、何をつくり出すかを知らなければならぬ。そうすれば、その人は、すべてこれらの事柄を総合して考慮したうえで、もっぱら魂の本性（της ψυχῆς φύσιν, the nature of his soul）のことに目をむけながら、魂がより不正になるような方向へ導く生涯を、より悪い生涯と呼び、より正しくなるような方向へ導く生涯を、より善い生涯と呼んで、より善い生涯とより悪い生涯とのあいだに選択（συλλογισάμενον αἱρεῖσθαι, a reasoned choice）を行なうことができるようになるだろう。そしてほかのことには、いっさい見向きもしないようになるだろう。なぜならば、われわれがすでに見定めたように、そのような選択こそは、生きている者にとっても死んでからのちにも、最もすぐれた選択（κρατίστη αἵρεσις, the best choice）にほかならないのであるから。

かくて人は、金剛のごとく堅固にこの考えをいだいてハデスの国（冥界）へ赴かなければならぬ。あの世においてもまた、富およびそれと同類の害悪に目をくらまされることなく、独裁僭主の生活やその他同様の境遇に落ちこんで多くの癒しがたい悪事をはたらいたり、さらには自分自身がもっと大きな害悪を身に受けたりすることのないために、しかり、できるかぎり現在のこの生涯においても、またこれから来るべきどの生涯においても、そうした外的条件に関しては、つね

に中庸（μέσον, the mean）の生活を選び、どちらからの方向に度を越えた生活を避けることを知るために・・・・・・。

なぜならば、人間はそのようにしてこそ、最も幸福になれるのだから（τῷ ἔπειτα οὕτω γὰρ εὐδαιμονέστατος γίγνεται ἄνθρωπος, for this is the greatest happiness for man）。

*1 この箇所に次のような訳注が付されている。

以下、これから生まれかわるべき生涯の選択のことが語られる（本文図２参照）。それぞれの魂は、籤によって決められた順番に従って、与えられた生涯の種類の見本のなかから自分の生を選ぶ。籤は運命によって決まり、選択は自由意志によるものであるから、人間の生涯は必然と自由との両方によって規定されていることになる。

*2 この箇所に次のような訳注が付されている。

各人にはそれぞれの運命を支配し導くダイモーンがついているという考えについては、『パイドン』107D 参照。ここでプラトンは、一般の通念を否定して、運命とは与えられるものではなく、むしろ各人が自分自身で選び取るものであることを強調している。

【資料 -43】

クセノポーン『言行録』2.1.18 ～ 34（佐々木理訳『ソークラテースの思い出』、岩波文庫、1953 年、に拠る、71 ～ 77 頁）

「何でな、アリスティッポス」[(12)] とソークラテースは言った、「君には、これらを喜んでするのと嫌なのにさせられるのとでは、これだけの相違があると思えないか、すなわち、喜んで飢える者は食べようと思えばいつでも食べられ、喜んで渇する者はいつでも飲むことができる、その他すべてかくのごとくであるが、強いられてこれらに苦しむ者は、もうやめようと思ってもよすわけにはゆかない。それからまた、喜んで難儀する（ταλαιπωρῶν, endures）者は、良い希望（ἀγαθῇ ἐλπίδι, hope）のあるために労働（πονῶν, his work）が楽しい。たとえば猟人は、獲物をとらえる希望のために気分よく苦労をする（μοχθοῦσι, toil）。しかも、こんな報酬はまだ骨折りの報酬として値打の小さいものである。しかし、良き友を得んとして、または敵を滅ぼさんとして、または身体（τοῖς σώμασι, body）ならびに精神（ψυχαίς, soul）を強健ならしめ、以て己の家（τὸν ἑαυτῶν οἶκον, their own homes）を立派に治め、友人の力となり、国家（τὴν πατρίδα, their country）のためにつくさんとして、刻苦精励する人々は、かかる大報酬のために喜んで労役を忍ぶと、どうして思わないでよかろう、彼らは自分自らに満足し、他人からは賞讃を受け、羨望の的となりながら、心楽しい生涯を送るのだ。その上また、安逸や直接の快楽は、体育の師匠の言葉であるが、肉体（σώματι, the body）に健全な状態（εὐεξίαν, good condition）をもたらすものでもなければ、また精神（ψυχῇ, the soul）になんら言うに足る知識（ἐπιστήμην, knowledge）を与えるものでもない。すぐれた人々の言うごとく、堅忍不抜の勉励こそ、善美の行為（τῶν καλῶν τε κἀγαθῶν ἔργων, fair and fine deeds）に到達せしめるのである。そしてヘー

シオドス[*1]もどこかでおなじことを言っている。

> 悪（κακότητα, vice）は如何ほどなりとも容易に手に入れ得べし。道は滑らかに、直ぐ近くに住もふ。されど徳（ἀρετῆς, virtue）の前面には不死の神々汗を置きたり。行く道は遠くまた嶮しく、初めの程は凹凸はげし。されど一たび頂上に達すれば、前には苦しくとも、今はまことに楽々と歩む。

そしてまたエピカルモス[*2]のこういう証言がある。

> 神は凡てのよき物（τἀγάθ’, good things）をわれ等に労役（τῶν πόνων, toil）と云へる値ひにて売り給ふ。

〔そして別の箇所でまた曰う。

> 阿房どの、柔らかき物（τὰ μαλακὰ, what’s soft）を望むなかれ、堅き物（τὰ σκλήρ’, what’s hard）を得もやせん。〕

そしてまた賢者プロディコス[*3]は『ヘ―ラクレレース論』なるものを著わし、多くの人々に読み聴かせているが、その中で徳についてまったく同じ考えを述べているのだ。私の記憶しているかぎりでは、大体次のように語っている。

ヘーラクレースが子供からまさに青年になろうとしていたとき、それは少年がいまや自己の主となって（αὐτοκράτορες γιγνόμενοι, becoming their own masters）人生に乗り出すのに、美徳の道によろう（τὴν δι’ ἀρετῆς ὁδὸν, by the path of virtue）とするか、それとも悪徳の道によろう（τὴν διὰ κακίας, by the path of vice）とするかを、現わしはじめるときであるが、彼は静かな場所へ出かけて行き、二つの道のどちらを歩もうかと[*4]当惑に暮れながら座っていたそうである。するとそこへ二人の身の丈の高い婦人が現われて、彼の方へ進んで来た。一人は容貌端麗に高貴の風があり、自ずとそなわる飾りとして身体には清らかさ、眼には恥らい（αἰδοι, modesty）、容姿にはつつしみ（σωφροσύνη, sober）があふれて、純白の衣によそおわれていた。いま一人はふっくりと柔らかな肉付きにふとり、顔は生地の色をなお白く、なお紅く見せるように化粧し、姿は生れつきよりも高く見えるようにつくり、眼は大きく見開き、若さの魅力のかがやくようにひき立つ衣をつけ、そしてたえず自分を眺め、誰か人が自分を見ているかと見まわし、またしじゅう己れの影法師を見やっていた。二人がヘーラクレースに近くなったとき、最初にのべた方の者はおなじ歩調で歩んで来たが、いま一人の方は先になろうと、走ってヘーラクレースのところへ来て、そして言った。

『ヘーラクレース、私はお前が人生へのいかなる道を歩もうかと当惑しているのを見る。私を友として進むならば、私はお前を最もたのしい最もらくな道に案内し、そしてあらゆる愉楽を一つとして余さず味わい、一切の苦労を嘗めずにす

まさせてあげよう。なんとなれば、第一にお前は戦争や面倒事を考えないで、ただいかなる珍味美酒を見つけようか、あるいは何を見何を聞き、また何を嗅ぎ何に触れるのが楽しいか、あるいはいかなる少年（παιδικοῖς, boy）を愛するのが最も心地よいか、あるいはいかにすれば最も柔らかな床に眠れるか、またいかにすればこれらすべてを骨を折らずに手に入れ得るかと、考えてすごせばよいのである。そしてまたこれらの歓楽の元手に事欠くうたがいが起っても、私がお前に身体や心を労役させ苦悶させてこれを得ることにみちびきはしまいかと、心配することもいらない。お前はただ他人が働いて作り出したものを使い、少しでも得になることは何一つ手をつけずにおかなければよいのだ。なんとなれば、私は私にしたがう人には、あらゆる所から利益を収める権能を与えるからである。』

ヘーラクレースはこれを聞いてからたずねた、『婦人よ、あなたはなんという名前の方ですか。』すると女の人は答えた、

『私の友人達は私を「幸福（Εὐδαιμονίαν, Happiness）」と呼ぶ、しかし私を嫌う人々は口悪く「悪徳（Κακίαν, Vice）」と名づける。』

そうしているうちに、いま一人の女が到着して、そして言った、

『私もお前のところへ来たのである、ヘーラクレース、私はお前の両親[*5]を知っているし、教育（τῇ παιδεία, education）を受けている間のお前の性質（τὴν φύσιν, character）もよく見ている。されば、もしもお前が私への道を歩むならば、お前もきわめて高邁荘厳な功績を残す秀れた人物となり、そして私もますます人に尊ばれ、よき賚のゆえにいよいよ声望を高めるであろうと、私は期待しているのである。しかし、私は楽しみの序曲を語ってお前を欺くようなことをせず、むしろ神々がこの現実を配置せられているとおりに、事実をありのままに語ろう。なんとなれば、世の中の善にして（ἀγαθῶν, good）美なる（καλῶν, fair）物のいずれの一つも、神々はこれを人間に労せず努めずしてお与えにはならぬからである。[*6]もし神々の恩寵を欲するならば、神々を尊崇しなければならぬ。もし友人に信愛されたいと思うならば、友人に善をほどこさなくてはならぬ。もしいずれかの都市から尊敬を受けたいと願うならば、そのためにつくさなくてはならぬ。もし全ヘルラス[*7]より高徳を謳われることを望むならば、ヘルラスの幸福につくすことをつとめなければならぬ。もしお前の土地がゆたかな実りを出すことを欲するならば、その土地を耕さなくてはならぬ。家畜の群によって富を得ようと思うならば、家畜の世話をしなくてはならぬ。戦争によって偉大となるを志し、そして味方を自由となし敵を屈服せしめんと欲するならば、まず戦術そのものを、よく知っている人々から学び、そしてこれの正しい運用について練習を積まなくてはならぬ。そしてまた身体を強壮ならしめんと欲するならば、身体（τὸ σῶμα, your body）をしてよく精神（τῇ γνώμη, your mind）(13)の下僕（ὑπηρετεῖν, the servant）たらしめ、労役と汗とを以てこれを鍛えなくてはならぬ（γυμναστέον, must・・・train）。[*8]』

すると「悪徳」が――プロディコスは語る――口を挿んで言った、

『ヘーラクレース、この女の語る喜びへの道が、いかに険しくまた遠いかがわかるであろう。しかし私は幸福への楽な近い道へ、お前を案内しようとしている。』

すると「美徳（’Αρετὴ, Virtue）」[*9] は言った、

『あさはかな女よ、お前になんの善い物があると言えるのか。また楽しみにしても、これのために何もしようとしないで、いかなる楽しみを知っているのか。お前は楽しみを欲する心の起るのさえ待たぬ人である。ほしい心の起らぬのに、あらゆる物を以て己を充たし、いまだ飢えざるに食い、渇かぬに飲み、そして味わいよく食わんがために料理人を手に入れ、味わいよく飲まんがために高価な酒を買い入れ、真夏に雪を求め[*10]て東奔西走し、心地よい眠りを得んがために柔らかな布団のみでは足らず、揺木匡[*11]を寝床に取りつけるのである。なんとなれば、勤労のためではなく、なす事なきがゆえに眠ろうとするからである。肉慾は必要を感ずる前に強いてこれを起し、あらゆる工夫をはかり男を女の代りに用いる。かようにお前は自分の友達を教育し、放埒の夜を暮し（τῆς μὲν νυκτὸς ὑβρίζουσα, running riot at night）、昼の貴重な時間を寝てすごす。不死の身でありながら神々からは見離され、善き人間からは馬鹿にされる。耳に聞く喜びのうちのもっとも楽しいものである我が身の賞讃を、お前は聞くことがなく、見る喜びのうちのもっとも心地よきものはこれを見ることがない。なんとなれば、いまだかつてお前は自らなした美しい仕事を見たことがないからである。誰がお前の言葉を信ずるであろうか（τίς δ’ ἄν σοι λεγούση τι πιστεύσειε, Who will believe what you say?）。誰がお前の頼みを容れるであろうか。また正気な人間の誰があえてお前の信徒の群に投じようとするか。この群れは若くして身体無力であり、老いては精神が空虚である。呑気に贅沢に育てられて青年期をすごし（ἀπόνω μὲν λιπαροὶ διὰ νεότητος τρεφόμενοι, idle and sleek they thrive in youth）、難渋し落ちぶれて老後を歩む。昔した事は恥（αἰσχυνόμενοι, shame）を遺し、今する事には難儀を嘗め、青年時代は快楽を追い（τὰ μὲν ἡδέα ἐν τῇ νεότητι διαδραμόντες, Pleasure they ran through in their youth）、窮乏を老後に積む。しかし私は神々とともに暮し、良き人々とともに暮す。神々の仕事も人間の仕事も、立派な仕事は私を離れては行なわれない。神々のところでも人間のところでも、私を尊ぶにふさわしいところでは、私はあらゆるものにまさって尊ばれる。職人（τεχνίταις, craftsmen）の中にあっては好もしい仲間（ἀγαπητὴ μὲν συνεργὸς, a cherished fellow worker）であり、主人らには信頼すべき（πιστὴ, faithful）家の守り手、召使いらには深切な保護者、平和（εἰρήνη, peace）な時の仕事の良き手伝いであり、戦争（πολέμω, war）のときの仕事の精悍な味方、友情の最良の相手である。私の友には食べ物、飲み物の甘美にして素直な楽しみ（ἀπόλαυσσς, enjoyment）がある。なんとなれば、彼らはそれらのほしくなる（ἐπιθυμήσωσιν, desire）まで待つ（ἀνέχονται, wait）からである。彼らの眠りは働かぬ人々よりも心地よく、そして眠りの終わったときも腹立つことなく、また眠りのゆえになすべき仕事を怠ることもない。若き者は老いたる人々の賞讃に逢って喜び、年長の者は若き人々の尊敬を受けて得意を覚え、過ぎし日の功績を楽しく追憶し、また現在の善い仕合せに喜びを味わう。なんとなれば、彼らは私によって神々には友となり、友人には愛せられ、祖国には敬われるからである。そして定められた終りのときが来ても、彼らは忘却（λήθης, forgotten）とともに栄誉もなく横たわることなく、記憶（μνήμης, remembered）

にとどめられ、讃歌にうたわれて、永遠に生きるのである。秀れた両親の子供、おおヘーラクレース[*12]、この道によって努力をはげむならば、お前は福祉の極みの幸福（τὴν μακαριστοτάτην εὐδαιμονίαν, the most blessed happiness）(14) に至ることができるのである。』

以上が大体プロディコスの語るヘーラクレースの『美徳』による教育の話である。ただこの思想を盛るに、彼はいま私の話したよりはもっともっと絢爛な言辞を以てしたのだ。しかしとにかく、アリスティッポス、君はこれらのことをよく心にとめて、将来の君の生活に対し少しく心を用いるように図ることが大切だ。」

*1 次の訳注がある。
ヘーシオドス――『仕事と日なみ』285 以下。
*2 次の訳注がある。
エピカルモス――すぐれた喜劇詩人。大体 530-440 頃。シチリアのメガラで育ち、長じてからは、シュラークーサイに住んだ。作品 35 篇もしくは 52 篇。長命して 90 歳もしくは 97 歳に至ったという。
*3 次の訳注がある。
プロディコス――ソークラテースと同時代の名ソフィスト。ケオス島の生まれ。彼の有名な神話「岐れ道のヘーラクレース」を伝えているのが実にクセノフォーンのこの箇所である。
*4 次の訳注がある。
二つの道のどちらを歩もうかと――ここまでのところをキケローが引用して、幸いに天神の子だからこういうよいことが人生の門出に起り得るが、われわれはそうはゆかない。われわれは未熟な少年時代に、よくも判断できず、自らの真の力や傾向も知らずに、よいと思う手本にもとづいて将来の道をきめる。多くは父にならい、また世の風潮にしたがう。心すべきであるとのべる。Cicero, De Officiis, I.32.118.
*5 次の訳注がある。
お前の両親を――77 頁「優れた両親の子供」の注を見よ (2 ノ 1 ノ 33)
*6 次の訳注がある。
神々は ･････ 労せず努めずしてお与えにはならぬ――20 節のヘーシオドスおよびエピカルモスの詩句とおなじ思想であって、これがさらにホラーティウスにさながら引用のごとくにうたわれる。nil sine magno vita labore dedit mortalibus.（生命は大いなる骨折りなくしては一物も人に与へず。）Saturae, I.9.59.
*7 次の訳注がある。
全ヘルラス――ヘーラクレースは全ギリシャ（ヘルラス）の英雄であって、この点、アムフィトリュオーンがテーバイの、テーセウスがアテーナイの、英雄であるのと異なる。
*8 次の訳注がある。
身体をしてよく ･････ 鍛えなくては――「しかもなお身体はよく鍛錬し、時務の遂行において、また労役に堪えることにおいて、判断および理性にしたがえるように、

訓練しなくてはならない。」Cicero, De Officiis, I.23.79.

*9 次の訳注がある。

「美徳」――Aretê. 前のところでこの女は名を名乗ってはいなかったが、いま一人の女の名が「悪徳」Kakia であるから、この女は「美徳」ときまっているごとくである。

*10 次の訳注がある。

真夏に雪を求め――葡萄酒を冷やすために用いるのである。

*11 次の訳注がある。

揺木匡――hypobathra. 寝台の下に取りつけた支えで、寝台をゆり動かす仕掛けである。

*12 次の訳注がある。

秀れた両親の子供、おおヘーラクレース――ヘーラクレースは父は神話も信仰もともに天空神ゼウスとする。母はアルクメーネーである。アルクメーネーはミュケーナイの王エーレクトリュオーンの娘で、テーバイの英雄アムフィトリュオーンの妻である。アムフィトリュオーンが戦場から帰って来る前夜、ゼウスはこの英雄の姿となってアルクメーネーに近づき、ヘーラクレースを宿させる。生まれた子は天神を真の父とし、アムフィトリュオーンを地上の父もしくは義父として育った。

＜注記と考察＞

(1) イェーガーは、ほとんど論じられることのない、「彼（= ソークラテース）が話をしている現実に存在する個人の（individual, des einzelnen Menschen 一人ひとりの）幸福へのソークラテースのあふれるほどの気遣い」という事実の、その思想史的意味を明瞭に指摘している。このことに、私たちの教育の実践と研究の根源動機[*1]= 根源思想を考えるために、意識を向けておきたい。

イェーガーは「なぜ厳格な哲学史家たちが、プラトーンが描くソークラテース像におけるこれらの相貌すべてを単なる詩的装飾として片づけてしまうのかを理解することは容易い」と述べ、続けて「哲学者たちはそのような関係を抽象的、学術的な意味において本質的ではないと見なすかもしれないが、プラトーンは、ソークラテースにとってそれは本質的であったということを示している。」と指摘している。[*2]

イェーガーは明確に、「ソークラテース文学（Socratic literature, Literatur der Sokratiker）の全てが、異口同音に、ソークラテースの学説は彼特有の持ち味（his individual self）から分離され得る、ということを否定している。」と述べ、さらに「この、ソークラテースによってあのように自信をもってはっきりと表明された価値尺度（this scale of values, Wertskala 価値の序列）と、麗しい古い酒宴の歌によく示されている、通俗的なギリシア人のそれとの間には巨大な隔絶が存在する。」と指摘している。

つまりイェーガーは、ソークラテースが「自分の魂を完成すること（the perfection of your souls, die Vollkommenheit eurer Seele）ほどに自分の身体や財産に注意を向けることのないように」と全精神もって説き続け、プラトーンが「魂」のことを理性的に探究していったことは、「幸福」観の歴史的転回を意味していると述べているのである。

ところでその「幸福」という言葉は、その主観的、情感的な響き（とりとめのなさ）ゆえに、現代の私たちの教育研究に登場することはほとんどない。しかし勝田守

一の論稿「子どもの幸福をまもる教師たち」（1952 年、『勝田守一著作集 3』、国土社、1972 年、所収）――それは恵那の綴方教師のことを考察したものであるが――の序論では、次のように明確に考察主題が述べられている。

> 子どもの幸福を守るということは現在の日本では、たいへんな事業である。しかし、これはまた子どもを愛し、理解する教師にとっては、当然の仕事である。子どもを愛し、理解する。これが恵那の綴方教師の出発点であり、その幸福を守る、これがその目標である。このささやかな報告はつきつめればそれがどのように行なわれているかを明らかにしようとして記されたものである。

その勝田の叙述からいくつかの文言を、論旨の説明を略したまま、並列的に引いてみよう。

> ･･･ 子どもは、感情のゆがめられない解放をともなって発展する感性的な行動によって、人間（パースナリティー）[*3] になる。教育は、人間にすることである。
>
> ･･･ それは表現活動によって、生活を直視することを通じて子ども自身が感情のしこりをときほぐすということである。まっすぐな認識がここではゆがめられた感情を人間的に蘇生させる。
>
> ･･･「魂の技師」である教師が子どもの心の問題を、綴方を通して把握し、子どもの抑圧された心を現実直視の指導によって、ときほぐし真直ぐに姿勢をのばした結果であろう。
>
> ･･･ その子にとっては、貧しいということの問題を考えることは人間としての成長にとってだいじなことである。かれは家の収入の多いことをほこることはないはずだ。みんなの問題に参加するという機会は、かれに人間としてのだいじな部分を成長させるであろう。
>
> ･･･「とりのこされた子ども」を指導した渡辺氏の記録は、みごとな生活指導によって、閉塞した子どもの精神が、表現と伝達というもっとも人間的な能力を獲得することを通じて、人間的に自覚して行く過程を語っている。そこでは、抽象的な表現の世界だけがだいじなのではない。教師という人間と「かけがえのない人間（パースナリティー）」である子どもとの「人間的な関係」が表現を通して次第に強く打ち立てられて行くことがだいじなのである。この関係を軸として、子どもの閉ざされた精神が開かれて行く。表現活動は教師への信頼の深さを前提とすると同時に、その信頼を深めるのである。この深まりつつある信頼の上に A 子の新しい世界が、きずかれて行く。
>
> ･･･ 石田氏は源一との間に綴方のやりとりを通して、人間的な関係を強めて行く。石田氏の赤インクの書き入れが源一を現実直視の態度に引き入れて行く。かれは考える子どもになり、表現する子どもになる。かれは立ち上がり、人間の子として目ざめて行く。

上に見てきたように、ギリシアの思想家たちは「幸福」をパイデイアー（教養・教育）探究の根源的動機として正面に据えている。勝田も「子どもの幸福」のこととして教育実践の研究を行なっている。イェーガーは「ギリシア人の人間人格の価値（the value of human character, die Würde des Menschen 人間の尊厳）の認識なくして、どうして（近代 Neuzeit が与えている：ドイツ語原文）個人の価値と重要性を要求する権

利（claim, der Anspruch 請求権）が正当化され得ようか。」（【資料 -37】）と論述しているが、勝田も、歴史的な共同社会との関係において、「人間（パースナリティー）」を凝視している。

イェーガーが指摘している「個人」の思想としての、たとえば「･･･ それは少年がいまや自己の主となって（αυτοκρατορες*4 γιγνομενοι, becoming their own masters）人生に乗り出すのに、・・・」（【資料 -43】）と述べられているような、自己統括の思想については、イェーガーの論述に学びつつ、プラトーンの思想を焦点にして、継続的に考察していこうと思う（本継続研究 (16)I. 4.［補筆について］（その 5）イ）(2a)（論文ページ 27）を参照のこと）。

また、日本国憲法第 13 条の規定と教育基本法（旧法）との本質的関連（「人格の完成」「個人（の尊厳・価値）」、「幸福」、そして「パイデイアー（教養・教育）」の内的関連）の考察などは機会を改めようと思う。

なお私は、上述した勝田の論稿については、佐藤広美著『戦後教育学と戦争体験――戦後教育思想史研究のために――』（大月書店、2021 年 5 月）、とりわけその「第 3 章　戦後教育学における「倫理的な問い」――1950 年代の『教育』と勝田守一――」に教えられて読み直した。

*1「根源動機」は動機というものの根源性を意識するための畑の造語である。

*2 このイェーガーの指摘は、拙論「世界にかかわって生きることと内的なものへの憧憬と――社会教育・生涯学習の哲学を考える」（畑・草野滋之編『表現・文化活動の社会教育学――生活のなかで感性と知性を育む――』学文社、2007 年、所収）の[1] (2)「青年のことを心配する」（著書ページ 16 ～ 17）の論旨に該当しよう。なお本論文 (22)I. 4.［訂正について］（その 11）ロ）を確認して欲しい。

*3 personality は、ここでは「人間であること」「人間としての存在」「人格」という意味だろう。

*4 αὐτο-κρατής:「自分自身によって支配する」「全権をもつ」「独裁的の」「独立した」「自由な」

(2) プロディコス：前 470/460 頃～前 399 以降。ケオース出身の文法家、ソフィストで、「･･･外交使節として各地を旅し、アテーナイなどで高額の授業料（50 ドラクメーという）を取って弁論術や言語学を教え、ソフィストたる評判を高めた。単語の意味の厳密な区別と正確な用語法を主張し、その講義にはソークラテースやエウリーピデース、イソクラテース、イソクラテースらも列なったという（ただし金欠状態のソークラテースは 1 ドラクメー分しか聴講できなかったと伝えられる）。」（松原著）という。

(3) ここでは、プラトーン『国家』が ‘ 古典中の古典 ’ であることを鑑みて、一切の注釈を省略しておく。

(4) イェーガーの「ストアー学派」に対する全般的評価に関しては、本継続研究 (21) III. 1) 1. を参照のこと。

(5)「『無知（’Αγνοιαν）』と『誤謬（Πλάνον）』」という「野獣」。私たちはこれを、「無知と偏見（ignorance and prejudice）」（ユネスコ憲章の前文：本継続研究 (20) IV. 1）1, 論文ページ 138）という ‘ 野獣 ’、というように重ねて解してよいだろう。「無知」と「偏見」「差別」「侮蔑」（さらに「無関心」）という感情については、その克服の問題として（教養・教育の問題として）、本継続研究で繰り返し論究していくだろう。

(6)「･･･すべてこういうものを今度はその人間の方が支配する（κρατεῖ）のです。以前のようにこれらのものに支配される（κρατεῖται）のではなくてね。」に関して。「支配する」「支配される」という見地は、勝田守一の教養･教育思想の前提的なものである。本継続研究 (16) I. 4. の［訂正について］（その 6）と［補筆について］（その 5）（論文ページ 26 ～ 27）を参照のこと。

(7)「気遣いし」は worry about (sorgen für (「配慮する」「心配する」「気遣う」「世話をする」) の訳である。『弁明』の該当箇所は ἐπιμελέεομαι（「配慮する」「気遣う」「面倒を見る」「顧慮する」）である（英訳：care for）。

(8) この前後の、アデイマントスが語る率直な通俗的な実感を、ソークラテース（プラトーン）は理性的に吟味していく。

(9)『仕事と日』の該当箇所では、ヘーシオドスは弟ペルセースに次のように語り聞かせる（松平千秋訳『仕事と日』岩波文庫）。

悪しきこと（Κακότητα, Misery）* はいくらでも、しかもたやすく手にはいる、
それに通ずる道は平らかであり、しかもすぐ身近に住む。
だが不死の神々は、優れて善きこと（’Αρετῆς, Excellence）の前に汗をお据えなされた、
それに達する道は遠くかつ急な坂で、
始めはことに凹凸がはなはだしいが、頂上に到れば、
後は歩きやすくなる――始めこそ歩きがたい道ではあるが。

* には次のような訳注が付されている。

ここに「悪しきこと（カコテース）」というのは道徳的な意味ではなく、むしろ貧しく悲惨な境遇を指すものと考えられる。一行おいて「優れて善きこと（アレテー）」と訳したのはその反対語である。要するにここでは両者とも物質的な概念で、ほとんど貧富を指すものと解したらよかろう。

この訳注に従えば、『国家』で引用された「詩」と『仕事と日』の対応箇所とでは意味合いが異なることになろう。

(10) 神谷美恵子がプラトーンの『ポリテイア』を読み終えて「自分の一生を決定するほどの「電撃」を受けた･･･」と述べ、「「電撃」はおそらく第十章の終わりにある神話のところで受けたのだろう」と回想しているが（本継続研究 (21)III.1）2.）、それは掲載資料のこの箇所の前後から巻末までのことであろう（掲載資料のこの続きは本継続研究（23）で扱う予定）。

(11) 本継続研究における、ἕξις と habit への関心については、本継続研究 (18) Ⅲの＜注記と考察＞ (8)（論文ページ 221 ～ 222）を参照のこと。

(12) アリスティッポス：前 435 頃～前 350 頃。ギリシアの哲学者で、「快楽主義を標榜するキューレーネー学派 Kyrenaioi の創始者とされる」という。本継続研究 (19) II. B. 12. の＜注記と考察＞ (1)（論文ページ 8 ～ 9）を参照のこと。

(13) γνώμη（精神）は , 内山勝利訳『クセノポン　ソクラテス言行録 1』（京都大学学術出版会、2011 年）では「意思」と訳されている。

(14)「福祉の極みの幸福」と訳されている τὴν μακαριστοτάτην εὐδαιμονίαν (the most blessed happiness) は 、上記内山訳書では「最も恵み多き幸福」と訳されている。

Received:December 01, 2021
Revision received:December 07, 2021
Accepted:December 08, 2021